

岡山県邑久郡牛窓町

乙佐塚古墳発掘調査報告書

1986.3

乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会

序

牛窓は古代より瀬戸内海航路の港町として栄えた所で、町内には往時をしのばせる史跡がいくつも点在しています。埋蔵文化財に目を向けましても、国史跡の寒風古窯跡群や縄文時代早期の黄島貝塚のように著名な遺跡があり、なかでも、牛窓湾をとりまく五つの大形前方後円墳は、古墳時代の大きな謎としてよく知られています。

このたび発掘調査を実施しました乙佐塚古墳も牛窓湾をめぐる古墳の一つですが、小形墳にもかかわらず予想外に豊富な遺物を出土し、誕生期の牛窓を理解する上で重要な資料を提供することができました。この報告書が文化財の保護・保存に活用され、歴史の研究や郷土の理解のために、いくらかでもお役に立てれば幸いに存じます。

末筆になりましたが、本調査の実施にあたり、いろいろと御指導・御協力を賜わりました岡山県教育庁文化課・岡山県古代吉備文化財センターならびに、邑久建設株式会社の関係各位に対し、厚く感謝申し上げます。

昭和61年3月

乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会

委員長 森 隆

例　　言

1. 本書は、記録保存のため発掘調査を実施した、岡山県邑久郡牛窓町牛窓4783-1に所在する乙佐塚古墳の調査概要報告書である。
2. 発掘調査は昭和52年3月15日から同年4月26日までと、昭和60年9月30日から同年10月8日までの二次にわたり実施された。
3. 第1次調査は岡山県教育委員会が調査の主体となり、経費については、岡山県と牛窓町が折半して負担した。第二次調査は乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会が調査主体となり、経費は邑久建設株式会社が報告書印刷費も含め負担した。
4. 第1次調査は岡山県教育庁文化課職員岡本寛久が主として担当し、同課職員山野康平の補佐を受けた。第二次調査は岡山県古代吉備文化財センター職員岡本寛久が担当した。
なお、第一次調査にあたっては、岡山県教育庁文化課職員（現岡山県古代吉備文化財センター職員）井上弘・岡田博・平井勝の援助を受けた。
5. 本書の作成は岡本が担当し、遺物の実測・写真撮影から浄写・執筆・編集までの全般にわたり作業にあたった。
6. 採図中の高度値はすべて海拔高であり、方位は第1図から第3図までが真北。他の図が磁北である。
7. 実測図の縮尺は表示しているが、遺物については、土器が $\frac{1}{4}$ 、鉄器・石器等は $\frac{1}{2}$ に統一している。
8. すべての採図・図版・表・文章を通じて、遺物番号は一致している。
9. 第2図は国土地理院発行の25,000分の1地形図「牛窓」（昭和28年第2回修正分）を $\frac{1}{2}$ に縮尺複製したものである。
10. 本報告書は概要報告であり、遺物については一部未整理のものを残している。今後整理を続け、発表の機会を待ちたい。
11. 出土した遺物および、実測図・写真是岡山市西花尻1325-3　岡山県古代吉備文化財センターに保管されている。

目 次

序

例 言

日 次

第1章 遺跡の環境.....	1
第2章 調査の経過.....	7
第1節 調査に至る経過.....	7
第2節 調査の実施.....	8
〈調査日誌〉.....	11
第3章 調査の結果.....	13
第1節 遺構.....	13
1. 立地.....	13
2. 墳丘.....	15
3. 横穴式石室.....	18
4. 閉塞施設と墓道.....	22
第2節 遺物.....	24
1. 遺物の出土状況.....	24
2. 土器.....	29
3. 金属器.....	39
4. 石器.....	41
5. 貝.....	41
6. 古墳に関係しない遺物.....	41
須恵器観察表.....	42
第4章 まとめ.....	44

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置.....	1	第7図 墳丘土層断面図 (S = 1/60)	16
第2図 乙佐塚古墳周辺遺跡分布図 (S = 1/500 00)	2	第8図 墳丘上列石・埴輪石平面図・立面図 (S = 1/30)	17
第3図 乙佐塚古墳位図 (S = 1/5000)	7	第9図 横穴式石室実測図 (S = 1/50)	19・20
第4図 玄室内玉砂利散乱状態 (S = 1/50)	9	第10図 石室床面平面図 (S = 1/50)	21
第5図 古墳周辺地形測量図 (S = 1/250)	13	第11図 閉塞石・墓道平面図・断面図 (S = 1/ 30)	23
第6図 墳丘測量図 (S = 1/150)	14		

目次

第12図 石室床面遺物出土状態 (S = 1/40) ······ 25	第18図 出土遺物 (4) 須恵器 (4) (S = 1/4) ······ 35
第13図 石室埋土中遺物出土状態 (S = 1/40) ····· 27	第19図 出土遺物 (5) 須恵器 (5) (S = 1/4) ······ 37
第14図 石室内出土遺物接合関係図 (S = 1/60) ····· 28	第20図 山土遺物 (6) 須恵器 (6) · 土師器 (S = 1/4) ······ 38
第15図 出土遺物 (1) 須恵器 (1) (S = 1/4) ······ 30	第21図 出土遺物 (7) 金属器 · 石器 · 貝 (S = 1/2) ······ 40
第16図 出土遺物 (2) 須恵器 (2) (S = 1/4) ······ 32	第22図 古墳に関係しない出土遺物 (S = 1/4 · 1/2) ······ 41
第17図 出土遺物 (3) 須恵器 (3) (S = 1/4) ······ 34	

図 版

図版 1	1. 乙佐塚古墳遠望 (北から) 2. 乙佐塚古墳遠景 (東から)	2. 玄室床面遺物出土状態 (南西から)
図版 2	1. 調査前埴丘 (西から) 2. 調査後埴丘 (北西から) 3. 調査後埴丘 (北西から)	図版13 1. 羨道部閉塞石縁辺遺物出土状態 (上方から) 2. 同上 (北東から)
図版 3	1. 増丘全景 (北から) 2. 調査後埴丘 (北東から)	図版14 1. 羨道部上方遺物出土状態 (北東から) 2. 閉塞石検出状況 (北東から)
図版 4	1. 調査後埴丘 列石と埴輪石 (東から) 2. 列石 (左・右上) と埴輪石 (右下)	図版15 1. 閉塞石検出状況 (南西から) 2. 玄室床面棺台・玉砂利残存状況 (南西から)
図版 5	1. 増丘断面 (北西から) 2. 増丘北東断面 (北西から) 3. 増丘西断面 (北から)	図版16 1. 玄室東側壁 (北西から) 2. 玄室西側壁 (南東から)
図版 6	1. 玉砂利路面 (北東から) 2. 第2次停止面 (南西から) 3. 第3次停止面 (南西から) 4. 第4次停止面 (南西から)	図版17 1. 羨道部東側壁 (西から) 2. 羨道部西側壁 (東から)
図版 7	1. 床面遺物出土状態 (北東から) 2. 床面遺物出土状態 (南西から)	図版18 1. 墓道 (西から) 2. 同上 (北東から)
図版 8	1. 玄室床面遺物出土状態 (南西から)	図版19 1. 玄室から見た羨道部 (北東から) 2. 墓頂からの眺望 (左:牛窓港 右:黒島)
図版 9	1. 玄室南半床面遺物出土状態 (北西から) 2. 玄室北半床面遺物出土状態 (北西から)	図版20 出土須恵器 (1)
図版10	1. 玄室北半床面遺物出土状態 (南東から) 2. 玄室南半床面遺物出土状態 (南東から)	図版21 出土須恵器 (2)
図版11	1. 遺物検出状況 (南西から) 2. 棺台周辺遺物出土状態 (南西から) 3. 棺台周辺遺物出土状態細部	図版22 出土須恵器 (3)
図版12	1. 羨道部床面遺物出土状態 (北東から)	図版23 出土須恵器 (4)
		図版24 出土須恵器 (5)
		図版25 出土須恵器 (6)
		図版26 出土須恵器 (7)
		図版27 出土須恵器 (8)
		図版28 出土須恵器 (9)
		図版29 出土須恵器 (10)
		図版30 出土須恵器 (11) · 土師器
		図版31 出土鉄器 (1)
		図版32 出土鉄器 (2) · 鋼器 · 石器 · 貝

第1章 遺跡の環境

乙佐塚古墳は岡山県邑久郡牛窓町牛窓4783-1に所在する。牛窓町は岡山県の南東部、瀬戸内海沿岸に位置し、面積2,760ha、人口9,500人を数える。町域はすべて邑久丘陵内に含まれ、大正年間以降に埋め立てられた錦海湾干拓地を除けば、ほとんど丘陵地によって占められている。丘陵内には多くの小河谷がみられ、この谷底と河口に、わずかな低地が形成されているにすぎない。町内の産業の主体は農業・漁業であるが、農作物としては野菜・果実類が米を大きく上回っている。乙佐塚古墳のある牛窓町牛窓地区は昭和29年の三箇町村合併(註1)以前の旧牛窓町にあたり、その町域は、錦海湾の深い湾入によってつくられた、長さ5km、幅1.5~2kmの東へ突出した半島の大部分と、その南東に点在する島嶼とからなっている。

半島は、最高所である標高166.9mの八間岩を中心として、長軸方向に丘陵頂部が連なり、この背稜部の南と北が傾斜地となって海岸に至る。半島の東部から南縁部にかけては丘陵の起伏が小さく、緩傾斜地となっているのに対し、背稜部付近とその北側ではかなりの傾斜地になっている。半島の南縁部には南へ突出した部分が二ヶ所みられる。牛窓本町付近と鹿忍鹿歩山^{かしのか おさん}である。この二つの突出部によって挟まれた入り江は、中央に位置する小丘陵の波歌山^{は かわやま}によって、さらに二分される。二分された入り江の東側が牛窓港であり、その付近が旧来の牛窓の街並である。これに対して西側は、近代以降埋め立てられて干拓地となり、町役場・中学校・中央公民館等の公共施設を中心として新しい街並が形成されつつある。鹿歩山の西の湾も現在干拓地になっているが、もともとは深い湾で、その奥部湾岸に位置していたのが鹿忍の村落である。

牛窓本町の南東海上には、幅250mの牛窓瀬戸を隔てて、前島が浮んでいる。前島は全長3.7km、幅1kmの細長い島であるが、東部の起伏は大きく、最高点で標高136.5mを測る。これに対して西部の起伏は小さく、緩やかな丘陵地形を呈している。前島のさらに南東には青島・黄島の二つの小島があり、南西には黒島が接している。黒島は全長600mの小島で、牛窓港の南2kmに



第1図 遺跡の位置（黒丸印）



第2図 乙佐塚古墳周辺遺跡分布図 ($S=1/50000$)

位置し、前島とは400mの距離にある。さらに、黒島の西には中ノ小島・端ノ小島の二つの岩礁が接している。これらの島々は、その位置からして、牛窓の半島にとって防波堤のような役割を果たしている。とりわけ、牛窓港にとって前島・黒島の存在は大きく、牛窓本町から鹿忍二塚山までの半島南縁と黒島・前島によって形成される円環が注目される。ここに、牛窓湾とでも呼ぶべき海域を想定することができよう。天然の良港牛窓は、このような地理的環境のもとに育まれたものである。

なお、半島の北には遠浅の錦海湾が広がっているが、その南湾岸には集落はほとんどみられず、入り組んだ地形を呈する北湾岸と、緩やかな丘陵地といくらかの平地をもつ湾奥に集落が点在している。

牛窓町牛窓地区は邑久丘陵の南端に位置していることから、岡山市西大寺や邑久町の平野部とは隔絶し、いわば、孤立した地域である。平野部との連絡道としては、現在の主要な道路とほぼ同一の道が考えられる。一つは県道岡山牛窓線であり、牛窓綱浦から鹿忍中浦を経て狩野千手坂を越え、岡山市上阿知、下阿知、邑久郷と旧海岸線を通る道である。もう一つは、牛窓綱浦から錦海湾へ出て、湾奥の集落を通って、邑久町本庄に至る道である。しかし、これらの道も、その行きつくところは吉井川か千町平野の後背湿地である。したがって、牛窓地区においては海路が主たる交通手段で、海によって、他の地域と密接に繋がっていたと考えられる。

牛窓町牛窓地区の表層地質は、半島の東端から南縁部以南は花崗岩質岩であるのに対し、その北では流紋岩質岩のホルンフェルスとなっている。風化深度は、花崗岩質岩では深く、約10m以深であるが、流紋岩質岩では中程度で、約10m以浅となっている（註2）。

牛窓町内の遺跡は現在100ヶ所程度を数えるが、その種別は古墳と窯跡と製塩遺跡によってほとんど占められ、時代も古墳時代から奈良時代に集中している。このような偏りが牛窓町での大きな特徴であり、それには、前述の地理的環境が少なからぬ影響を及ぼしている。

牛窓町において、遺跡が爆発的に増加するのは古墳時代であるが、町内における先人の足跡はそれよりはるかに古く、縄文時代早期にまで溯る。牛窓沖に点在する島々では、押型文土器の出土が知られており、なかでも、黄島に所在する黄島貝塚では発掘調査が実施され、大きな成果をあげている（註3）。黄島貝塚は早期のものとしては規模が大きく、一つの集団の根拠地であったことが考えられる。この黄島貝塚では、早期の他に中期・後期の土器も出土しており（註4）、縄文人が時々この地域で活動したことを見せていている。しかし、その土器量は少なく、また、半島部では縄文土器の出土が見られないことから、他地域を根拠地とする人々が、狩猟や漁撈のために、一時的に滞在したにすぎないものと考えられる。

弥生時代に入っても、牛窓地域は人跡稀な土地であったようである。町内における弥生土器

の出土は二・三ヶ所を聞くにすぎず、集落跡は未確認である。そもそも弥生時代が水稻農耕を前提とするだけに、現在においても畑作が農業の主流となっているこの地域の地理的環境は、きわめて大きな影響力を発揮したことと考えられる。弥生時代になって、人間の足音はさらに遠のいた感がある。

牛窓が歴史の表舞台に登場するのは古墳時代であり、それはきわめて唐突な出来事である。古墳時代前期の4世紀後半、本蓮寺裏の丘陵頂部に全長約90mの前方後円墳、牛窓天神山古墳（註5）が築造される。葺石をもち、円筒埴輪を統らせ、内部主体は板石積みの竪穴式石室と推定される定型化した大形古墳である。牛窓地域のあまりにも貧弱な弥生時代の様相からすれば、水稻耕作開始後の生産力の順調な発展の結果という、一般的古墳発現の経路は考えられず、いきなり全長90mもの前方後円墳が出現することは大きな謎となっている。

さらに注目されることは、牛窓天神山古墳に継続して4基の大形前方後円墳が築造されていくことである。まず、全長約83mで周溝をもち、前方部三段築成の鹿歩山古墳（註6）が鹿歩山頂上に築かれる。ついで、全長約70mの黒島古墳（註7）が黒島の最高所に営まれる。黒島古墳からは円筒埴輪や楔形・蓋形・人物などの形象埴輪と共に、古式の須恵器が出土しており、五世紀後半の築造と考えられる。黒島古墳に続くのは波歌山古墳（註8）である。半島南縁の入江を二分する小丘陵の上に築かれ、全長約50mを測る。二段に構築され、前方部と後円部に各一つの竪穴式石室を備えていた。やはり須恵器が出土し、6世紀前半の築造かと考えられる。この古墳は工場拡張によって未調査のまま破壊され、現存していない。最後に造られた古墳は二塚山（双塚）古墳（註9）である。半島の付け根にある湾を挟んで鹿歩山と対面する山塊の突端尾根上に築かれている。全長約55mで、後円部径と前方部前面幅が近似している。後円部に大形の横穴式石室をもち、その全長は13m以上と推定されている。6世紀の中頃に築かれたと考えられる。

このように、一つの系譜に連なるとみられる5基の前方後円墳が牛窓湾をとり巻くような形で存在する背景についてはいくつかの説がなされているが（註10）、いずれも、瀬戸内海航路を介しての畿内との結びつきに着目している。また、単に牛窓だけではなく、その北方に開けた邑久・長船の平野部をも含めた、邑久郡（旧大伯国）の吉備における特異性にも注意しなければならない。すなわち、邑久地域の在地首長であったと考えられている大伯国造は吉備氏一族とは同族の系譜関係をもっておらず、六世紀には吉備氏から自立して、畿内政権と直接に結びついていた可能性が指摘されている（註11）。

牛窓における大形前方後円墳の築造は二塚山古墳を最後とするが、それを持っていったかのように、小形円墳が半島の丘陵頂部を中心に集中して構築され始め、約50基の円墳からなる阿弥陀峰古墳群が形成されることとなる。ほとんどの古墳は丘陵頂部から丘陵南斜面に位置し、横

穴式石室は海に向かって開口している。もっとも、乙佐塚古墳のように、その古墳群と離れて築造された小形古墳もあり、施歩山や二塚山では小規模な群集もみられる。

この六世紀という時期は邑久地域にとって大きな変革期であったと考えられる（註12）が、それは、窯業と塩業という二つの産業が大規模に集中して開始されることからも類推される。

長船町土師に所在した木鍋山一号窯跡（註13）は六世紀前半の須恵器窯であるが、これ以後、邑久地域では須恵器生産が本格化し、牛窓町と邑久町の境界付近の邑久丘陵に大規模な邑久古窯跡群が形成される。牛窓町側には国史跡に指定された奈良時代前半（飛鳥期）の寒風古窯跡群（註14）があり、須恵器だけではなく、陶棺や鷦尾も生産していた。須恵器生産は奈良時代後半になると邑久町西須恵の地に移り（註15），さらにその後、片上沿岸へと東進し、やがて備前焼を生み出す（註16）。

須恵器生産と相俟って塩生産もこの時期に開始される。牛窓町の錦海湾沿岸や牛窓港沿岸では製塩土器である師楽式土器の大規模な散布地があり、盛んな塩生産を物語っている。土器名の由来となった師楽は錦海湾南岸の集落である（註17）。

須恵器は、律令制確立とともに税体系の整備によって、備前國の調とされる（註18）ものであるが、その起源が6世紀に遡っていることは、邑久地域と畿内との結びつきを考えるうえで重要である。そして、牛窓港が大量の須恵器の積み出し港としての役割を担なっていたことは確かであろう。

これ以降、牛窓港は瀬戸内航路の重要な港として近世まで繁栄を続ける。室町時代の『兵庫北関入船納帳』に記載された牛窓港籍船の運搬石高はずば抜けており、江戸時代には朝鮮通信使の宿泊港として指定されている。

なお、「乙佐塚」について記載している郷土史誌があるので、その記事を紹介しておく。昭和5年刊行の『岡山県通史』上編の第16章岡山県に於ける古墳には、大正八年以降の実施調査に係るものとして、「乙佐塚 紺浦綾浦の境上 南北二丘相連り各一の堅穴を有す」とあり（註19），昭和28年刊行の『改訂 邑久郡史』上巻の第5章古墳では、「乙佐塚、紺浦、綾浦ノ境上 南北二丘相連り各一の堅穴を有す。前方後円式、後丘高八尺、半径二十尺、長径五十尺。」とある（註20）。この「乙佐塚」と今回発掘調査した本古墳との異同については後述で検討する。

註

（註1） 昭和29年10月1日、牛窓町・能忍町・長浜村が合併し、現在の牛窓町が発足した。

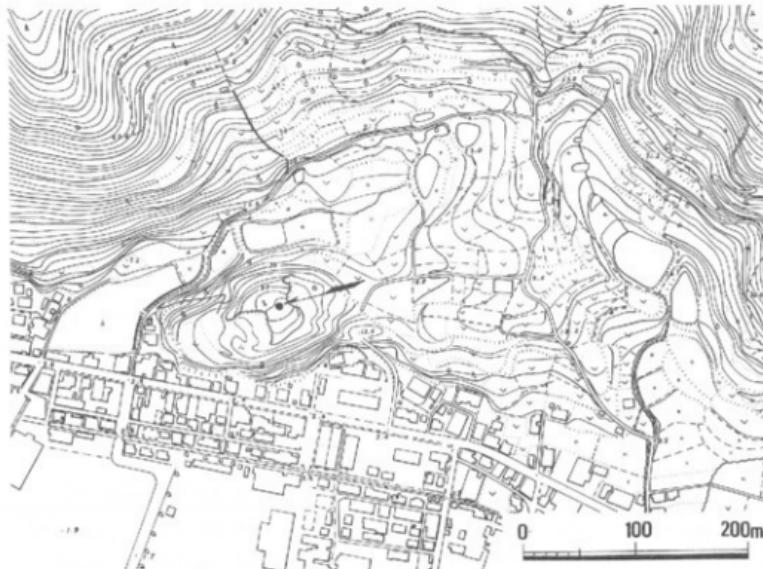
（註2） 高橋達郎・光野千春・水木弘一郎・平岡正夫『土地分類基本調査 西大寺』岡山県企画部 1979

- (註3) 藤岡謙二郎・増上安男・中野栄治・青木良信・島田曉「瀬戸内海黄島貝塚発掘概報」『日本史研究』第11号 1949年
- (註4) 河瀬正利「岡山県黄島貝塚出土の遺物について」『帝釈峠遺跡群発掘調査室年報IV』広島大学文部省帝釈峠遺跡群発掘調査室 1981年。著者は第24図4の土器を「船元式土器ともおもわれる」としているが、前期末の單木I式土器に近似しているようにもみえる。
- (註5) 近藤義郎「99 牛窓大神山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年近刊
- (註6) 近藤義郎「100 鹿歩山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年
- (註7) 近藤義郎「101 黒島古墳」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年
- (註8) 近藤義郎「102 波歌山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年
- (註9) 近藤義郎「120 二塚山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年
- (註10) 近藤義郎「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』第10号 1956年
吉田晶「古代邑久地域史に関する一考察」『岡山県史研究』第7号 1984年
- (註11) 吉田晶『日本古代國家成立史論』東京大学出版会 1973年 第3章第5節
西川宏『吉備の国』学生社 1975年 192頁
- (註12) 古田晶 前掲書
- (註13) 江見正己「131 木鍋山一号窯」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年
- (註14) 山藤康平・西村康「寒風古窯址群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27 岡山県教育委員会 1978年
- (註15) 福田正徳・平井勝・岡本寛久・安川豊史・宇垣国雅「西谷遺跡」岡山県長船町教育委員会 1985年
- (註16) 伊藤晃「備前焼」『えとのす』第25号 1984年
- (註17) 近藤義郎「132 師楽遺跡」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年
- (註18) 「新訂増補 国史大系 延喜式」 卷第二十四 宅計上
- (註19) 水山卯三郎『岡山県通史』上編 岡山県 1930年。本文の表中の記載では、波取山両丘の記事に対して「同上」となっている。
- (註20) 小林久磨雄編『改訂 邑久郡史』上巻 邑久郡史刊行会 1953年

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

牛窓町牛窓地区はほとんどが丘陵地からなっているため、人家は半島の南岸沿いに細長く連なり、街区を形成している。また、半島の背稜部から南は地盤の風化が進行しているため、丘陵がじょじょに傾斜を緩め、人々に起伏に富む畑地を提供している。このように、きわめて限られた平地と開墾のいきとどいた畑地という環境の中では、宅地や耕地の新たな開発はいきおい丘陵地の削平という方向をとらざるを得ない。一方、前述のように、半島部南半の花崗岩地盤は風化が深くまで及んでいるため、掘削が容易で、土木建築用の山土の供給源として利用されている。地質的に連続している岡山市西大寺神崎町周辺では大規模な採土工事がなされ、丘陵がいくつも消滅しつつある。乙佐塚古墳の所在する小丘陵は半島背稜部からの傾斜面の末端に位置し、緩傾斜地の独立丘陵という様相を呈していた（第3図）。採土工事の対象として目をつけ



第3図 乙佐塚古墳位置図（矢印黒丸）（S = 1/5000）

けられたのは必然であったかもしれない。

乙佐塚古墳の所在する丘陵は、昭和52年の調査以前、すでに周辺から土取りをされ、東と南の崖面は古墳の直前にまで迫っていた。乙佐塚古墳は昭和42年3月に発刊された全国遺跡地図には記載されていなかったが、地元ではオトサ塚と呼び、古墳である可能性が強いと地元史家から指摘を受けていた。幸いにも採土工事は岩盤に当ったためか中断されていたが、古墳の東と南は落差約20mの断崖となり、自然崩落の危険性が憂慮された。古墳とおぼしき高まりは現状で70~80cmの高さをもち、中央には1×2m程の穴があり、径は10m程度と推測された。遺物の散布は顯著ではなかったが、須恵器片が一片採集されていた。昭和51年、このような状況について県教育委員会と牛窓町教育委員会が協議した結果、このまま放置すれば、崩落による資料の損失を招くと判断されたことから、昭和52年3月からまず確認調査を実施し、古墳であることが判明すれば速やかに記録保存の処置を講じることで合意した。なお、経費については県と町で折半することが併せて取り決められた。

第1次の調査は前述のような経過で実施されたが、種々の理由から、古墳は閉塞石下のみ未調査のまま埋め戻し、保存されることとなった。その後8年間、自然崩壊も起らず古墳は守られてきたが、昭和60年に入つて再び採土工事の話がもちあがり、県教育委員会・町教育委員会・建設業者の三者による協議の結果、建設業者による経費負担で町教育委員会が未調査部分を発掘調査した後、丘陵全体を削平するということで結着をみた。第2次の発掘調査は昭和60年9月から実施されることとなつた。

第2節 調査の実施

第1次調査は昭和52年3月15日に開始された。調査は、まず、古墳の確認から始めることとしたが、古墳が丘陵頂平坦面の東端に偏って位置していたため、古墳西側の丘陵平坦面での遺構の有無の確認も実施することとした。古墳とみられる円丘の中央で直交する二直線を測量用の座標軸として設定し、直線上に任意の間隔で杭（第5・6岡N1～5・E1～5）を打っていった。この東西線（Eライン）と南北線（Nライン）に沿つて幅60cmのトレンチを掘り下げた。トレンチ調査の結果、封土や埴堀の大石が検出され、また、墳丘中央部では、約2mの距離をおいて石列が確認されたことから、石室の存在が想定され、古墳であることは確実となつた。しかし、古墳の西側の平坦面では遺構は確認されなかつた。

調査は古墳部分に集中されることとなり、EラインとNライン部分を土層観察用に残して、埴堀を露呈させていく作業に移つた。古墳の北半では埴堀に平坦面がめぐつてゐたため、埴堀の検出は割合に容易であった。古墳の東側や西側では、埴堀から少し離れて岩盤の露頭がみられたが、当初はこれを一段目の葺石と誤認していた。古墳の周辺では他にも露岩があり、かな

り未整備な、荒れた状況にみうけられた。墳丘の発掘が終了した時点で、石室の掘り下げを開始することとした。

石室は横穴式であった。天井石はすでにすべて失われていた。羨道の中央を通って奥壁に至る畦と、これに直交する畦を、玄室で二本、羨道で一本設定して、掘り下げていった。掘り下げ後まもなく、完形の須恵器や紡錘車の出土をみた。床面より1m以上も上にあたるため、かなりの搅乱（盜掘）があったものとみられた。そこから20cmほど下から玉砂利が散見されるようになり、一度掘り下げを止めて、面として清掃してみた（第4図）。しかし、玉砂利個々はかなりの高低差をもち、面的に散らばるというより、石室埋土中に混在していると判断された。この玉砂利は床面に敷かれていたものの一部であったことが後に明らかとなった。さらに掘り下げを続ける途中で、多数の完形須恵器や小骨片も出土し、そのたびに、埋葬痕跡の確認に努めたが、木棺痕跡等なら検出できなかった。床面から10cmほど上で、はじめて盗掘壙らしきものを検出したが、埋葬痕跡の確認には至らず、ついに床面に達するまで埋葬痕跡は見い出せなかった。

羨道部分の掘り下げでも、床面よりかなり上方から鉄鎌や土師器の完形品が出土し、同じ高

さから、備前焼大甕の破片も出土した。このことからすれば、中世以降に石室全体にわたる搅乱があったと考えられた。それから少し下がって閉塞石が現われはじめた。掘り下げが進むにつれて、閉塞石の範囲は広がり、ほとんど閉塞時の状況を残しているものとみられた。また、閉塞石付近の土はきわめて固く、このことからも、搅乱は閉塞石を避けたと考えられる。

この時点あたりから、経費の面で、調査の完遂が不安となってきた。当初予想していた以上に、古墳の残りが良かつたためである。石室は天井

第4図 玄室内部玉砂利散乱状態 (S = 1 / 50)



石を欠くものの、側壁はほとんど残存し、遺物も100点を超え、閉塞石もほぼ完存の状態にあったのである。町教育委員会も、これ以上の採土工事は当分ないと判断し、できれば植栽して保存したいとの意向を示したため、以後、埋め戻して保存する方向に調査を変更することとした。

石室内の遺物は実測後取り上げたが、床面の玉砂利は除去せず、閉塞石も検出状況の作図に止め、取りはずさないことにとした。墳丘も封土は除去せず、Eラインに沿って断割トレンチを入れ、土層を観察するにとどめた。最後に埋め戻しを行ない、調査を終了した。

なお、第1次調査の体制は下記の通りである。

岡山県教育庁文化課

課長 小林孝男 参事 西口秀俊 主幹 水田稔

文化財二係長 光吉勝彦 文化財保護主事 山磨康平 主事 岡本寛久

牛窓町教育委員会

教育長 松本幸男 教育課長 合内敏夫 社会教育係長 高橋重夫

第2次調査は、第1次調査の終了後八年を経た、昭和60年9月30日から実施された。今回の調査は破壊を前提とした記録保存処置で、主に、前回の未調査部分を対象にしたものであった。調査にあたって、実施機関として、牛窓町教育委員会、岡山県古代吉備文化財センター及び邑久建設株式会社の三者で構成された、乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会を設置した。

調査は石室内に埋め戻された土の排除作業から開始された。調査部は人力によったが、玄室は主に重機によって実施した。まず、閉塞石を完全に露呈させ、断面図を作成しつつ、石を除去していく。次に、それと併行して、床面の玉砂利層を除去する作業に入った。玉砂利の下には砂質土が敷かれていることがわかり、これも除去し、地山面を露呈させ、側壁最下部の立て面の補削を行なった。閉塞石下には、予想通り、破碎された須恵器の出土をみ、玉砂利も残存していた。実測、取り上げ後、墓道の掘り下げに移り、その間、側壁の先端部の実測を行なった。

最後に、墳丘の断割にかかったが、封土全体の除去は断念し、北西区四分の一の断割を重機を中心にして実施した。また、丘陵頂の西半平坦部についても、急のため、トレンチを1本設定して掘り下げ、遺構のないことを確認した。第2次調査は10月8日をもって終了した。

乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会

委員長 森 隆（牛窓町教育委員会教育長）

副委員長 橋本泰夫（岡山県古代吉備文化財センター次長）

委員 表 登（牛窓町教育委員会参事）

委員 高橋重夫（牛窓町教育委員会教育課長）
委員 河本 清（岡山県古代吉備文化財センター調査課長）
委員 岩本寛久（岡山県古代吉備文化財センター文化財保護主事）
監事 佐々木清（岡山県古代吉備文化財センター総務課長）
監事 小竹茂樹（邑久建設株式会社代表取締役）
事務局長 表 登（牛窓町教育委員会参事）
専門委員 時実和一（牛窓町文化財保護委員）

<調査日誌>

昭和52年（1977年）

- 3月15日 地形測量。実測用ポイント設置。
- 3月16日 地形測量。
- 3月17日 鎮魂式。発掘調査開始。東西南北各トレンチ掘り下げ。ボーリング棒探査で石室の存在推定。
- 3月18日 南西区表土剥ぎ。東・北トレンチ掘り下げ。東トレンチの墳壠で大石検出。
- 3月19日 北東区表土剥ぎ。墳丘の北に突出部を確認。石室は横穴式と判明。
- 3月23日 北東区表土剥ぎ。墳形を帆立貝式と推定。葺石らしきもの検出。
- 3月24日 北東区・南西区表土剥ぎ。前方部、葺石精査。葺石ではなくて風化した岩盤であることが判明。
- 3月25日 北西区表土剥ぎ。南西区清掃。前方部精査。帆立貝式の墳形を確認。
- 3月26日 南東区表土剥ぎ。北西区・南東区墳端部検出作業。
- 3月28日 南東区表土剥ぎ。墳頂部分清掃。石室の掘り方検出できず。
- 3月29日 墳丘全景写真撮影。石室検出作業。石室内掘り下げ開始。
- 3月31日 墳頂中央部土層観察用柱土層断面図測定。柱除去。石室内掘り下げ。墳丘・石室上面の平面図略測。閉塞石検出。玄室内の推定床面上方80cmから完形・半完形の須恵器や石製紡錘車出土。
- 4月1日 玄室内遺物出土状態実測。
- 4月6日 玄室玉砂利散乱状態実測。玄室埋土の検討。羨道玄門付近の掘り下げ。
- 4月7日 玄室玉砂利散乱状態実測。羨道遺物出土状態写真撮影。石室埋土の検討。
- 4月8日 玄室内掘り下げ。須恵器・鉄器・骨片出土。出土面の精査・写真撮影。出土状態実測。羨道遺物出土状態実測。羨道部掘り下げ。石室埋土の検討。
- 4月11日 玄室内遺物・骨片出土状態写真撮影・実測。玄室内掘り下げ。羨道部横断土層

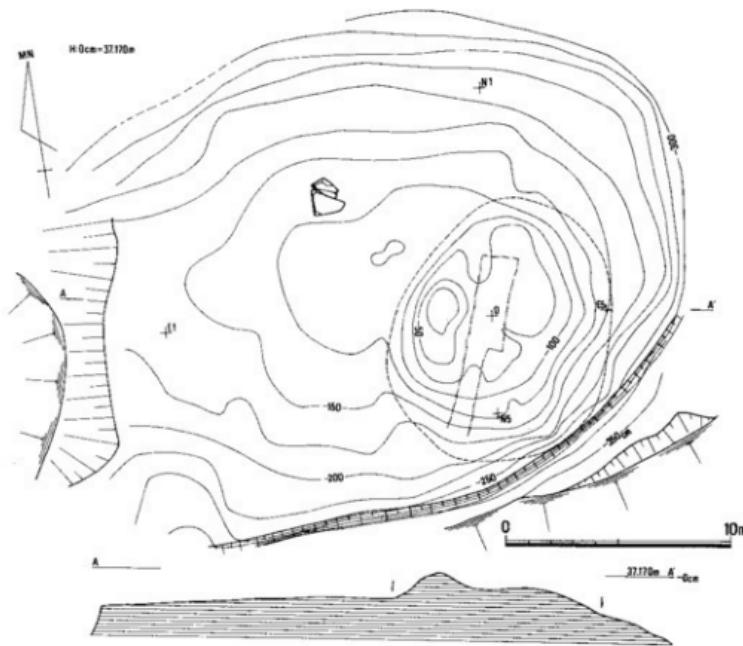
- 写真撮影・実測。羨道遺物出土状態実測。墳丘地形測量。玄室中央から金環出土、精査するも埋葬痕不在。
- 4月12日 玄室横断面土層写真撮影。周辺埋め戻し開始。
- 4月13日 玄室内耳環出土上面清掃・写真撮影。玄室内掘り下げ（床面上方30cmまで）。羨道部縦断土層図実測。羨道部掘り下げ（床面上方30cmまで）。閉塞石清掃。
- 4月14日 玄室内掘り下げ。閉塞石掘り出し、清掃。墳丘全景写真撮影。墳丘北斜面列石実測。
- 4月15日 墳丘写真撮影。玄室内遺物出土状態写真撮影・実測。玄室内掘り下げ（床面上方10cmまで）。羨道遺物出土状態実測。閉塞石掘り出し。墳丘列石実測。
- 4月16日 玄室内掘り下げ。精査・写真撮影。埋葬痕跡なし。床面までの掘り下げ。羨道部掘り下げ。閉塞石掘り出し。墳丘列石実測。
- 4月17日 石室床面検出作業。玉砂利敷床面確認。閉塞石掘り出し。
- 4月18日 石室床面検出・清掃作業。石室内遺物出土状態写真撮影。埋め戻し作業。
- 4月20日 石室内遺物出土状態実測。遺物取り上げ。墳丘断割土層図実測。埋め戻し作業。
- 4月21日 石室内遺物出土状態実測。遺物取り上げ。墳丘断割土層図実測。墳丘外西トレソ掘り下げ。埋め戻し作業。
- 4月22日 石室内床面玉砂利敷残存状況写真撮影。閉塞石写真撮影。石室実測用割り付け。石室埋土精査。
- 4月23日 石室実測。閉塞石実測。埋め戻し。
- 4月26日 石室実測。閉塞石実測。埋め戻し。第1次調査終了。
- 昭和60年（1985年）
- 9月30日 石室羨道部の埋土除去。
- 10月1日 石室玄室の埋土除去。閉塞石検出。
- 10月2日 閉塞石平面図実測。閉塞石の断面図実測と除去。
- 10月3日 閉塞石の断面実測と除去。石室床面の玉砂利除去。
- 10月4日 閉塞石下、遺物出土状態の実測。遺物取り上げ。石室床面下、砂質土除去。墓道掘り下げ。石室側壁清掃、写真撮影。
- 10月7日 石室側壁実測。墓道断面土層図実測。墳丘断割。丘陵西半でトレソ掘り下げ。
- 10月8日 石室側壁実測。墳丘南北断面土層図実測。墳丘断割面写真撮影。トレソ掘り下げ。第2次調査終了。

第3章 調査の結果

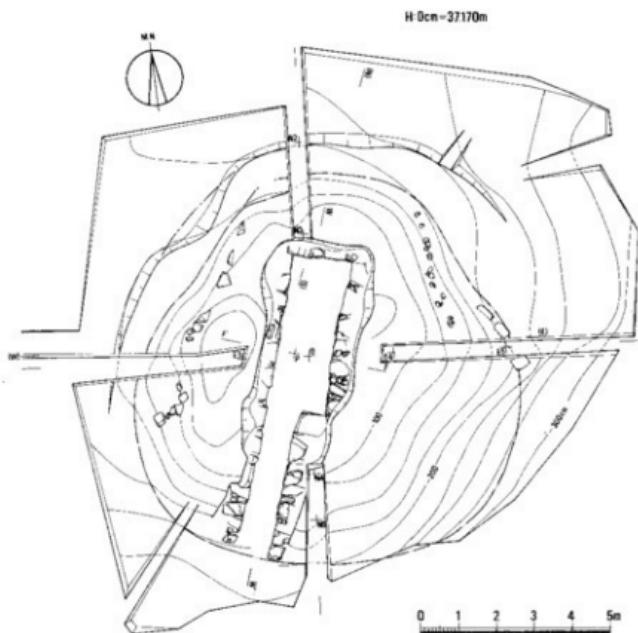
第1節 遺構

1. 立地（第2・3・5図 図版1）

乙佐塚古墳の所在する丘陵は半島の南縁部に位置する。丘陵周辺は半島の南斜面の末端部にあたるため、傾斜は緩やかで、比高16mの丘陵は小島のような印象を与える。丘陵の北には小さな河谷が西から入り込んでいるため、その独立性が一層強められている。丘陵の南辺は古くから削平され、県道調山牛窓線が走っているが、古墳時代にはこの道路あたりに海岸線があったと考えられる。したがって、丘陵の南端は波打ち際で、狭い砂浜か、あるいは海水に洗わ



第5図 古墳周辺地形測量図 ($S = 1/250$)

第6図 墳丘測量図 ($S = 1/150$)

れる崖であったと想像される。この丘陵の前面は、波歌山を挟んで牛窓港に隣接する小さな入り江となっているため、沖合から眺めれば、波歌山と鹿歩山に挟まれた入り江の中央付近に小丘陵が望まれることになる。その丘陵頂部に位置する乙佐塚古墳は、当然に、海を強く意識していたと言わざるをえない。

乙佐塚古墳の位置する丘陵頂部は、採土によって西端と東端の一部、さらに北西端が削平されているが、現状で、東西22m、南北15mの平坦面をなしている。最高点は海拔36mを測る。古墳はこの平坦面上に築造されているが、最高点よりは南東側へ5m程度はずれている。墳丘は、調査前の現状で、直徑9×12m、高さ1mを測ったため、南東の墳丘裾は丘陵の平坦面から傾斜面への変換点あたりに達していた。このように、丘陵最高点をはずして、どちらかといえば、平坦面の端に築造されていることは、古墳の全体を見せようとする視覚的な配慮によっていると考えられる。古墳の位置するところは、平坦面とはいながら、東西の墳裾で60cm程度の高低差のあるごく緩い斜面のため、視覚的効果はより高められたであろう。古墳の位置か

らすれば、その視覚的效果は、南東方向、あるいは東・南方向を対象にしたものとみられる。

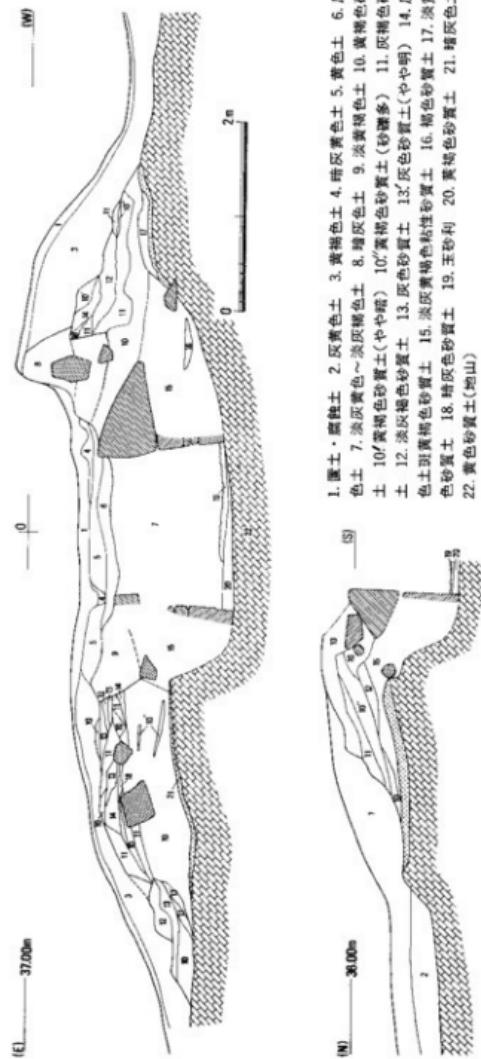
2. 墳丘 (第6・7・8図 図版2~5)

発掘調査の結果、残存する墳丘は長径10.5m、短径10m、高さ1.35mを測り、その平面形は、北側が少し突出した西洋梨形を呈する不整形なものであった。墳丘の北半では、墳裾から1~3mの幅で平坦面がめぐり、その縁辺は高いところで30cmの段となっていた。周溝は検出されなかった。墳丘上には角礫が散乱していたが、とくに、西半に顯著であった。墳丘周辺にも多くの角礫の散乱がみられ、あるいは葺石や外護列石の存在していた可能性もあるかと、調査当初には考えた。しかし、後述するように、墳丘西半は後世の破壊を大きく受けているとみられ、本来、墳丘内にあった角礫が露呈させられたものと判断された。第7図をみると墳丘内に複数の角礫を認めることができる。また、墳丘周辺の角礫の多くは地山に含まれているもので、なかには節理を残す岩塊もあり、多くは転落したものではないことが明確となった。墳丘東半では角礫の散乱はほとんどみられなかったが、墳丘裾で長径50cm程度の角礫が3個接近して検出され、北東部の中腹でも、長径15~20cmの礫15個からなる石列がみつかった。この二つの石列は、その在り様から考えて、人為的に置かれたものと判断された。

この検出された墳丘が、どの程度、当初の状態を残しているかが問題となるが、以下、第7図の墳丘断面図を参照しつつ、考察することとする。

発掘調査によって確認された層序は、大きくみれば5層からなる。第1層(第7図1)は腐蝕土層であり、上面には落葉の堆積がある。第2層(第7図2・3)はしまりのない軟かな土で、やや濁った色を呈する。墳頂から流れた土と考えられる。第3層(第7図4~6)は墳頂の凹部にみられ、盜掘等の擾乱に伴う堆積土である。6の土は少しまりがあり、あるいは踏みしめられたものかもしれない。第4層(第7図8・9)も、次の第5層を切断する形で嵌入されていることから、擾乱による堆積とみられる。さらに、残存する石室の側壁上端に接していることからすれば、この第4層が石室の天井石の除去と深く関わっている可能性が高い。第5層(第7図10~18)が古墳本来の封土である。この層はさらに上下二層に分けられる。上層は性質の異なる薄い土層が何層にも積まれて形成されているのに対し、下層は厚い層二層からなっている。これは、後述するが、古墳の築造法によって生じたものである。

このように、墳丘断面の観察で確認された封土の残存状況を、再度第7図で検討してみると、墳丘のかなりの部分が破壊されていることが判明する。残存する封土の高さは1.35mで、石室の側壁上端をやや越す程度にすぎない。本来は、さらに天井石の厚みとその上を覆う封土があったわけで、その厚さについて県内の実例をみると、新見市横見1号墳で1.4m(註1)、筒山市龍王塚古墳で1.1m(註2)の残存例が知られている。したがって、乙佐塚古墳の残存墳丘は半分程度低くなっていると推測される。また、断面の東半と西半を比較すると、石室中軸

第7図 墳丘土層断面図 ($S = 1/60$)

線から現墳端までの距離は、東で 5.2 m あるのに対し、西は 3.9 m にすぎない。西側の墳丘表面は荒れ、墳丘内にあった角礫が多数露出していることなどから、東側に比べ、西側での破壊が大きかったと考えられる。さらに、北側での墳丘断面図をみると、層序第5層の上層部分が途中で切断された形になっているうえ、墳裾から北へ張り出した平坦面の直上近くから、羽釜片や近世以降とみられる磁器片が出土したことから、北側の墳丘もかなりの破壊をうけ、墳裾の平坦面は、近世以降、新しく作り出されたものであることが知られる。この墳裾の平坦面が墳丘の西側まで認められたことは、西側での墳丘破壊をさらに裏付けるものと考えている。

以上のような考察から、乙佐塚古墳は築造後にかなりの破壊をうけていることが明らかである。したがって、現存墳丘の規模は築造時のそれをかなり下回っている。さらに、現存墳丘は、東部から南西部までが



第8図 墳丘上石列・埴端石平面図・立面図 (S=1/30)

破壊されたものであるため、これから築造時の規模を推測することは困難と思われる。しかし、墳丘の南から南東部分の残存状態をみれば、墳形は円形とみられることから、おおまかな推測は可能である。すなわち、石室の玄室平面の対角線の交点を古墳の中心点とし、石室の横道先端部を埴端とすれば、半径約6mの円丘が復元される。そして、その高さは3m程度あったかと想定される。

なお、「改訂 邑久郡史」に記載された「乙佐塚」古墳と本古墳との同一性であるが、まず、「南北二丘相連りて」と記す前方後円墳については、本古墳が北側を大きく破壊されているため、確認は不可能である。ただ、しいて言えば、破壊されながらも、北側が少し突出した西洋梨形の残存墳丘を止めていることに、前方後円形の名残りを見出しうるかもしれない。また、記録された計測値のうち、「半径二十尺」は前述の推測した半径6mに近い値を示している。もっとも、前方部・後円部各一つの豎穴を有するという記事は明らかに相違している。このように、所在地や墳丘規模は近似しているが、墳形は確認しえず、内部主体は相違しているという状態であり、決め手に欠ける。もし、前方部が破壊されたものならば、その時期

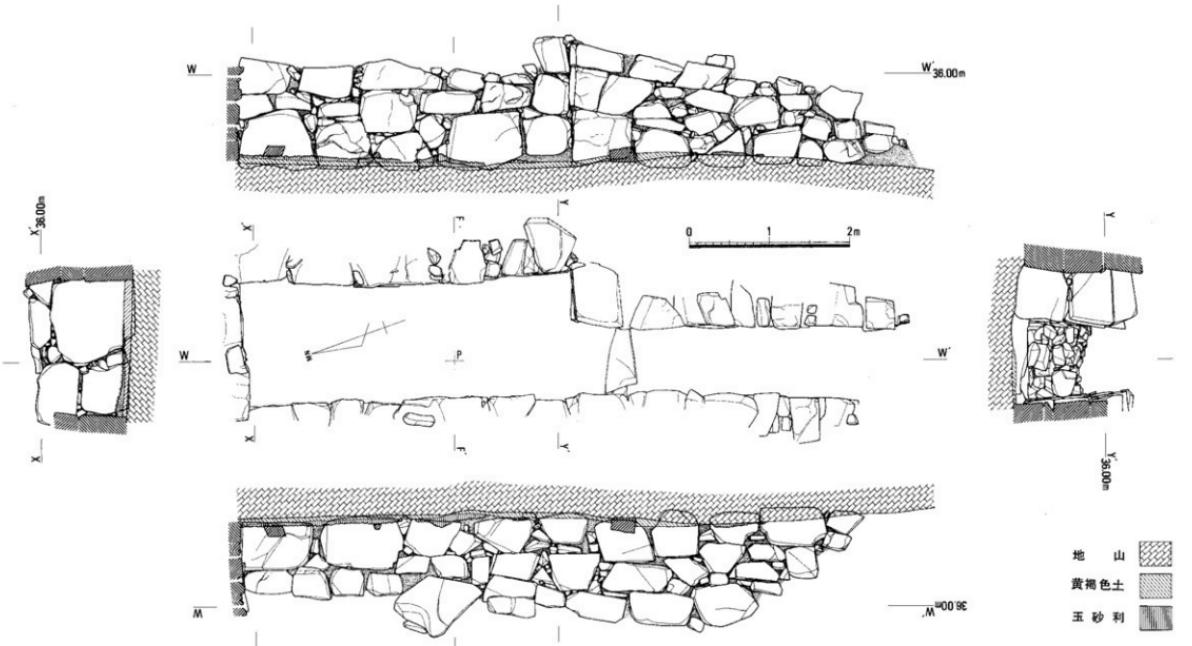
は、『改訂 邑久郡史』の刊行された、昭和28年以降のこととみられることから、今後、地元での聞き込みを精力的に行う必要がある。

最後に、墳丘断面の観察から考えられる本古墳の築造過程を記してみたい。まず、築造予定地を整える作業があるが、この作業はあまり入念にはなされなかったようである。それは、墳丘下に旧表土とみられる暗灰色土の薄層（第7図21）が存在し、それが西から東へ緩やかに自然の傾斜を保っていることから判断される。このことは、墳丘周辺にみられた岩塊の存在から考えて、削平作業が困難であったことによると思われる。したがって、本格的な古墳築造工事は、次の石室掘り方の掘削から始まったと言える。掘り方掘削後、石室をまず下半分だけ構築する。その裏側には裏込石を入れ、掘り方を埋めるまで土を詰める。さらに石室を上端まで積み上げ、その裏側には、同様に、裏込石を置き、石室上端まで封土を盛り上げる。次に、天井石を据え、石室が完成する。その後は、性質の異なる土を薄く、何層にも積み上げ、墳丘を整形し、築造は終了する。なお、墳丘東半で確認された二列の列石であるが、もともとは墳丘内に埋没していたものとみられ、あるいは封土の崩落防止の施設かとも考えるが、その用途は明確にしえなかつた。

3. 横穴式石室 （第9・10図 図版7・16・17・19）

乙佐塚古墳の内部主体は横穴式石室である。石室は左片袖式で、細長い長方形の玄室と、それとほぼ同じ長さの羨道からなっている。石室床面での計測値は、玄室長 4.2 m、玄室幅 1.7 m、羨道長 4.1 m、羨道幅 1 ~ 0.9 m、石室全長 8.3 mである。石室の残存高は 1.6 mを測る。床面での石室断面図（第10図）をみると、西側壁は玄室から羨道まで石がほぼ一直線に並べられているが、袖のある東側壁は、玄室部・羨道部とも直線ではあるが、玄室部が西側壁と平行するのに対し、羨道部は石室入口へ向かって狭くなるように傾いている。玄室の平面形は、東側壁が袖のところでごくわずか 5 cm 程開くが、ほぼ長方形で、短辺と長辺の長さの比が 2 : 5 をなし、中軸線の方位は MN -18° 30' - E を測る。

石室の壁は割石を用いて少し内側へ傾くように積み上げている。壁面全体としては大きな凹凸はみられず、持ち送りの手法にはなっていない。奥壁は、基底に二個の割石を置く。西側には 60 cm 四方の石を置き、その東隣りに 110 cm 四方の大石を据えている。西側の石の上にはもう一つ同大の石が置かれ、その上端と合わせるように、大石の上に小さな割石が載せられている。したがって、残存部分の上面はほぼ平坦になっている。側壁は長辺が 100 ~ 40 cm 程度の大小の割石を積んでつくられている。玄室部と羨道部の石の相違はほとんどみられず、東側壁の羨道部の一部にやや小ぶりなものが使用されているにすぎない。また、石の積み方も、玄室部と羨道部で異なることはない。側壁の基底部には、長辺 100 ~ 60 cm 程度のやや大きめの石を据え、その上に、整った面を内に向けるようにして割石を積んでいる。側壁の上部ほど小口積みが多

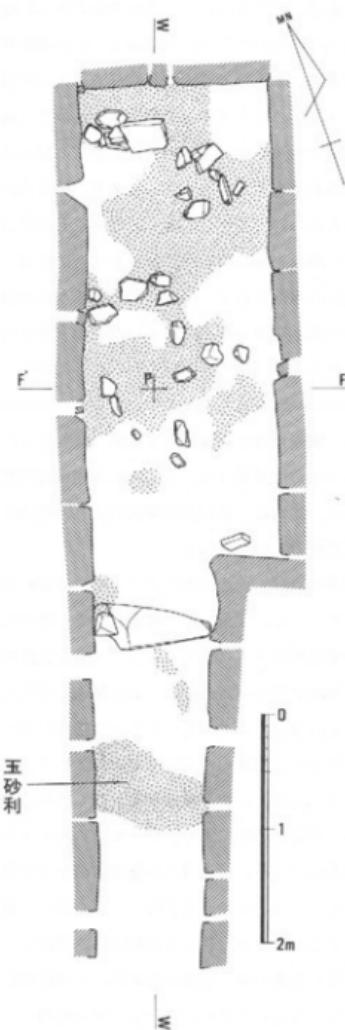


第9図 横穴式石室実測図 ($S = 1/50$)

いようである。袖の部分は、袖の幅だけある石を積み重ねている。

側壁も奥壁の場合と同様、石を何段か積んだところで平坦になるようになっていている。東側壁では、玄室部の残存上端から袖石の二段目上面を通り、羨道部の三段目上端へ続く線が認められ、西側壁では残存部上端が割合に揃っている。その平坦面の高さは、奥壁で 1.2 ~ 1.3 m、東側壁では 1.3 ~ 0.9 m、西側壁で 1 ~ 1.3 m と近似している。このことは、石室の構築が、羨道部から玄室部まで同時になされたことを意味している。それはまた、側壁の羨道部と玄室部で相違が認められないことからも言えることである。なお、前述の古墳の築造過程との関係で言えば、石室の掘り方を埋める段階では、石室はかなり上まで積まれていたようである（第7図）。あるいは、この奥壁や側壁の積み上げ途中にみられる平坦面がその段階での上端であったかもしれない。

石室の床面には玉砂利が撒かれていた（第10図）。玄室の南四分の一から羨道 2 m 分までの間では玉砂利がほとんど検出されなかったが、石室埋土中に多量の玉砂利が含まれていたことから、この部分については、盜掘等の攪乱によって消失したものと考えられる。この部分に、斑点状にみられる玉砂利の固まりは、往時のかすかな痕跡である。玄室の他の部分にみられる虫食いも攪乱によるものであり、盜掘の及んだ範囲を明瞭に知らせ



第10図 石室床面平面図 ($S = 1/50$)

てくれる。このように、玄室の全面と羨道の奥から 2.4 m までは、厚さ 5 cm 前後で玉砂利が敷き詰められていたことが知られる。この玉砂利の下には、さらに黄褐色土が敷かれていた。礫をあまり含まない砂質土で、掘り方の床面に残された掘削時の凹凸をならし、床面を整えたものである。この土は羨道の奥から 1.6 m まで敷かれていた。

床面で他に目につくものは、玄室では棺台に使われたとみられる割石で、羨道では仕切り用に置かれたと考えられる大石である。棺台石については第4章で触れることとし、ここでは仕切り石について説明しておく。仕切り石は羨道の奥から 50 cm のところに位置する。長さは 103 cm で、羨道の幅に等しく、石室を完全に区切っている。幅は 30 cm、厚さは 20 cm あり、掘り方の底面に直接置かれている。この石が置かれた後に床面の整備が行なわれているわけで、石室の構築当初から設計案に入っていたものと考えられる。玉砂利はこの仕切り石から石室入口側 1.6 m のところまで敷かれているが、この石を境として、その奥と前とでは、場の持つ意味が異なっていたと考えられていいだろう。

4. 閉塞施設と墓道（第11図 図版12・14・15・18・19）

本古墳の閉塞施設は、石室内の大規模な擾乱にもかかわらず、かなり良好な残存状況を示していた。これは、第11図の閉塞石より内側の土層断面図で明らかのように、盗掘が密集した閉塞石を避けたためである。

閉塞施設は、羨道の奥から 1.9 m の位置に始まり、羨道いっぱいに、長さ 3.6 m、最高 0.8 m にわたって、多量の石が積まれ、その隙間は砂質土で充填されていた。とくに石室先端までは密集状態にあった。石は大きいもので長径 40~50 cm あり、一人では動かせないものもみられた。検出状態からは、石は一気に積み上げられたようにみえたが、断面観察や取り除く際の知見から、少なくとも二度、あるいは三度に分けて積まれたものであることが明らかとなった。それは主に、閉塞石の隙間を充填している土の相違から考えられた。第11図の 16 と 17 の土は類似しているが、しまり具合がまったく異なる。16 はあまりしまりのない、バサバサした土であるが、17 はきわめて固く、叩き締められたような感じを与える土である。閉塞石の在り方を断面図からみると、16 と 17 との境界線の上下で違いが認められる。とくに石室の先端部をみると、線から下には石がほとんどなく、多くの石が線より上にあって、そのまま石室前面の石に連なっていく。この 16 と 17 の土の相違は時間的な差によって生じたもので、現象としては、17 の土を生じた埋葬の後、追葬がなされ、その際 16 の土が積まれたものと考えられる。なお、17 の土の下に、さらにきわめて固い土（第11図 18）がわずかに残存していて、この土の覆う閉塞石が床面に密着していることや、次に述べる、羨道の断面観察の結果から、この土とその下の石が、さらに古い埋葬に伴う閉塞施設の痕跡である可能性が強い。

なお、閉塞施設下も含む羨道床面で、炭化物の薄層が一面に検出された。この薄層そのもの



第11圖 閉塞石・墓道平面図・断面図 ($S = 1/30$)

の正体は不明であるが、その層の下から貝殻片が出土したことから、あるいは葬送儀礼に伴うものかと思われる。

閉塞施設を取り除き、石室の前面を精査した結果、石室の先端から南へ伸びている墓道を検出した。墓道は幅 100 cm、深さ 27 cm あり、1.8 m 分が残存していた。墓道の埋土は、第11図の J-J' 断面では四層が確認された。このうち、20の土には玉砂利がまれに含まれていることから、この土は追葬時に堆積した可能性が考えられる。また、22の土は花崗岩の碎片を含む、かなりしまった土であり、古墳築造後、間もなく堆積したものではないかとみている。先に述べた閉塞施設の断面観察と関係させて考えると、19の土はしまりのない土であり、位置から考えても、閉塞施設の上半にみられた16の土に対応すると判断される。したがって、20の土は17の土と対応することになり、17の土も追葬時の閉塞に伴うものということになる。このように、閉塞施設と墓道のそれぞれの断面を関係させて考えると、最低三度の埋葬が行なわれたことが知られることとなる。

この墓道がどこへ下っていくかは興味のあるところだが、丘陵が削平されたために、ごくわずかしか残存分がなく、明確ではない。ただ、残存部分をみると、わずかではあるが南東方向へ曲がる様子をみせている。あるいは、波歌山の北側の平地から、綾浦地区を目指していたかも知れない。

第2節 遺 物

1. 遺物の出土状況 (第12~14図 図版 6 ~14)

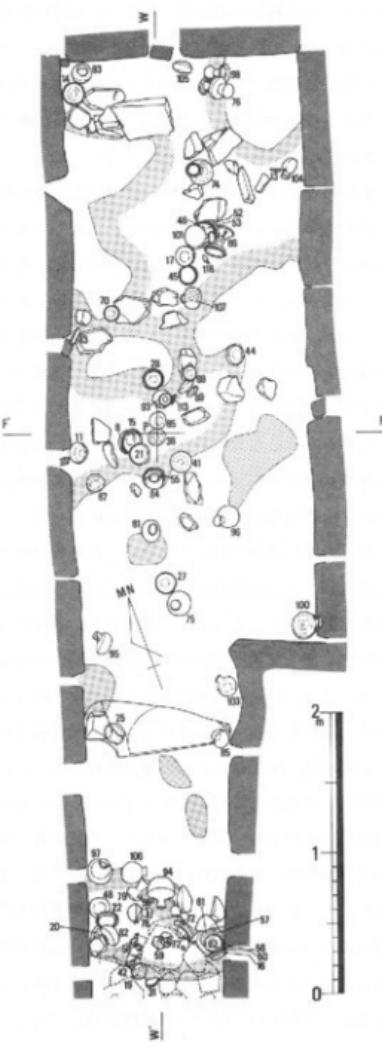
発掘調査によって出土した遺物はかなりの量にのぼる。図示したものは須恵器 107 点、土師器 4 点、備前焼 1 点、金属器 20 点、石器 4 点、貝殻 1 点を数えるが、須恵器についてはこれ以外にも口縁部の小破片があり、個体数としては 120 点程度に達するものと推測される。また、備前焼と土師器 1 点、石器 2 点は古墳時代のものではなく、本古墳とは直接関係していない。

床面から出土した遺物は総出土量の半数にのぼるが、出土位置には偏りがみられ、玄室の奥半分と羨道の閉塞石縁辺に集中している(第12図)。この位置は玉砂利の残存範囲とよく重複しており、玉砂利の欠失部分が攪乱を受けていることによると考えられる。また、須恵器の型式別の位置関係にもまとまりが認められ、玉砂利上の遺物はほぼ原位置を保っているものとみられる。なかには石室埋土中の小破片と接合したものもあったが、床面上に本体があることから、攪乱によって一部を欠いたものの、原位置からはそう動いていないものと判断される。

玄室の遺物配列をみると、玄室奥部の西半で石と遺物とに囲まれた長方形の区画が目にとまる。並べられた須恵器をみるとさまざまな器種がみられ、型式の上からも同一のものがかなり集まっている。さらに、焼成時にセット関係にあった杯・蓋が二組(14・15, 44・45)と、

少なくとも使用中にはセット関係にあつたとみられるものが三組（17・18, 52・53, 54・55）もあり、この方形区画を形成する須恵器が同一時期に副葬されたものであることがわかる。したがって、方形区画の北辺と南辺の石を宿台と考え、ここに木棺1基の存在を想定できる。

閉塞石縁辺に密集して出土した須恵器は堅い土に覆われ、副葬当時の姿を保っていることは疑いない。とくに、東隅に積み上げられた杯・蓋は印象的であるが、それは同一窯で焼成されたと考えられるもので6点中5点までが占められている。西壁側にある短頸壺（82）と平瓶（97）もその窯で焼かれた可能性が強く、この閉塞石縁辺の一群の土器も同時に副葬されたものと考えられる。また、閉塞石の下からもいくらか須恵器の出土をみたが、完形品がその場で破碎された状況を示すもののがみられ、前述の東隅の杯・蓋と同じ窯で焼かれたとみられるものが二点（58・59）あることから、閉塞石縁辺の一群の須恵器と同時に副葬されたものが、閉塞石の積み上げの際、破碎されたと考えられる。破碎した石が故意に置かれたものか、転落によるものかは明確ではないが、須恵器の破片は羨道内に飛び散ったようで、羨道埋土中出土の破片と閉塞石下の破片で接合関係にあるものが多い（第14図）。この

第12図 石室床面遺物出土状態 ($S = 1/40$)

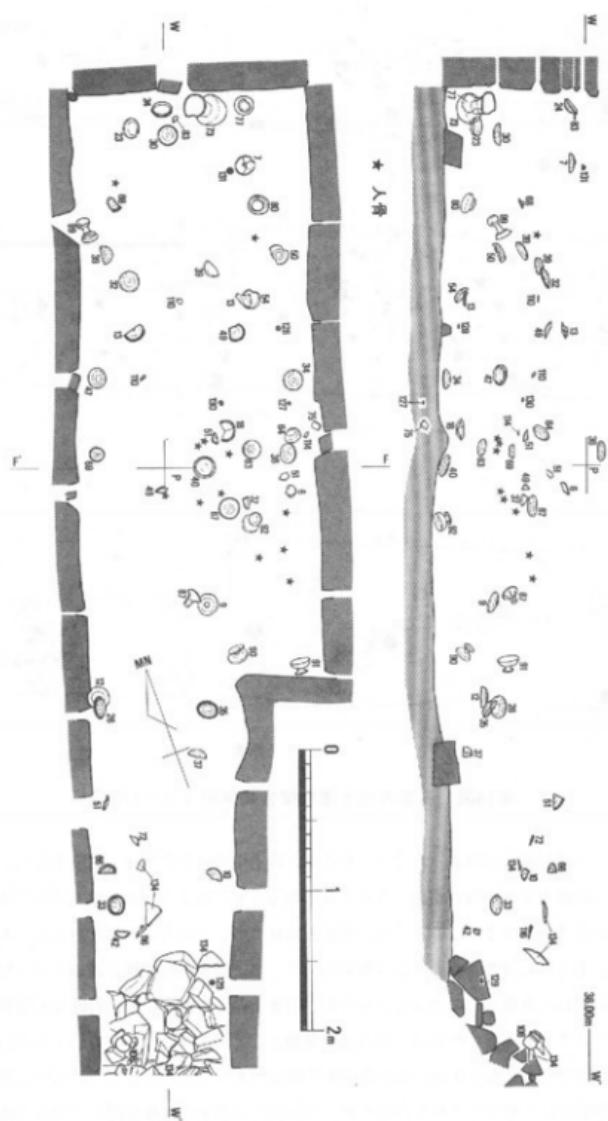
ように、閉塞石下の須恵器も副葬された原位置を保っているものと考えられるが、なかに一点、大形壺（72）の胴部破片のみの出土があり、これについては、あるいは他の位置にあったものが追葬時に破壊されて閉塞石下まで移動させられ、そこで破碎されたのかもしれない。

なお、床面から鉄器が2点出土している。鎌（118）が玄室の方形区画の東辺から、刀子（113）が同区画の南側からである。

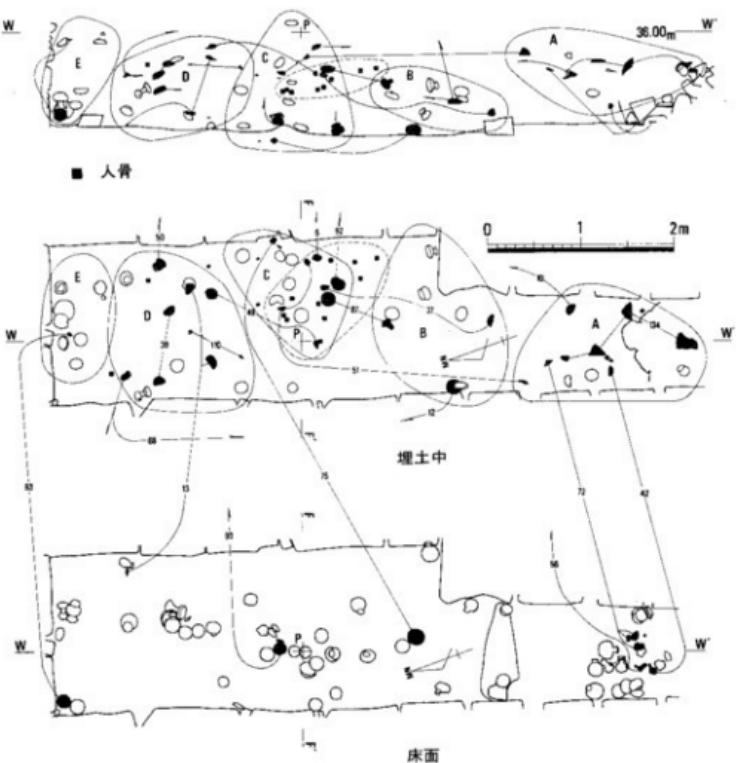
石室の埋土中からも多量の遺物が出土している。その分布状況をみると、もっとも出土位置の高いものは石室の残存部分の最高所近くにまであり、また平面的には、羨道と玄室を問わず、石室内全体に散らばっている（第13図）。したがって、遺物は第7図の7の層中全体に拡散しているとみてよい。埋土中には玉砂利も多く含まれ、その分布状況は遺物と同様全体に拡散しているが、やや上部に集中している。埋土中の遺物の接合関係をみると（第14図）、埋土中と床面上との接合が7例、埋土中のみでは12例あり、これに対して床面上のみは1例にすぎない。埋土中の12例のうちには玄室と羨道にまたがる接合が5例あり、遺物が大きく動かされていることがわかる。なお、特異な遺物として、人骨と備前焼大甕片（134）の出土がある。いずれも複数の破片となっているが、かたまって検出されている。前者は玄室の中央からやや羨道寄りに、後者は羨道の閉塞石末端付近にあった。

埋土中の遺物の出土状態から、石室内全体にわたって大規模な攪乱のあったことは明らかであるが、その具体的な状況はどうであろうか。まず、玉砂利や遺物の広範な分布から、それらが散乱することとなった搅乱の以前、石室内は完全に土で埋まっていたことが考えられる。石室内の埋土は粘土のブロックを含む軟かな土で、床面に至るまで明瞭な土の変化はなかった。このことは、石室が自然に流れ込んだ土で埋まったのではなく、人為的に埋められたことを語っている。したがって、誰かが石室の天井石を取りはずした後、石室を埋めたものであろう。この際には、床面はほとんど搅乱されなかったことが遺物出土状態から明らかである。盗掘を目的としたものではなかったのであろう。それから後に、大規模な搅乱が行われる。埋土中の遺物の出土状態を注意してみると、遺物が五つのブロック（A～E）にまとめられることがわかる（第14図）。土器片の接合関係をみると、1ブロック内や隣接するブロック間でみられ、また、A・D・Eではその下の床面上の遺物との間に認められる。このことは、各ブロックが、搅乱の一つの単位であることを示していると同時に、それらが連続した関係にあったことも教えていている。この大規模な搅乱は床面にまで達していることから盗掘を目的にしたものと考えられるが、金環をはじめ多くの遺物を残していく、ある特定の物品のみを目的にされたものとでも解釈せざるを得ない。

なお、最初の石室を埋めた行為の目的であるが、これについては人骨と備前焼大甕の出土が鍵になる。盜掘に大甕を携行するとは思われず、それ以前に大甕は石室内に埋まっていた可能



第13圖 石室埋土中遺物出土狀態 ($S = 1/40$)

第14図 石室内出土遺物接合関係図 ($S = 1/60$)

性が強い。人骨は床面ではまったくみつからず、埋土中のみから集中して出土した。一般的には床面から遊離した方が保存が悪くなるとみられるため、出土した人骨はもともと床面にはなかったものと考えられる。このような、大甕と人骨についての考えをまとめると、大甕は甕棺であって、石室内に埋葬されたという解釈ができる。盜掘者は大甕を破壊して人骨に気づき、骨のみを石室内に再葬したのではなかろうか。羽釜上器（135）の他に青磁片も閉塞石付近で出土していることから、中世にはこの古墳が墓地として使用されていたものとみられる。

埋土中の遺物はもともと床面の玉砂利の欠失部分にあったものと考えられるが、擾乱が主に上方への移動という形でなされているため、平面的には本来の副葬位置から大きく動いているものは少ないようく判断される。

2. 土器 (第15~20図 図版20~30)

調査によって出土した土器は須恵器・上師器・備前焼・青磁・染付など多種にのぼるが、ここでは、古墳の被葬者に副葬された須恵器・上師器について述べる。

a. 須恵器

107点を図示したが、他にも口縁部等の小破片があり、個体数は120点を越えるであろう。器種は蓋・杯・壺・榢・高杯・鍵・半瓶・提瓶・横瓶等ほぼすべてが描っている。大規模な搅乱にもかかわらず、遺物全体の様相は最終追葬時から大きく変化していないものとみている。

蓋・杯 (1~70)

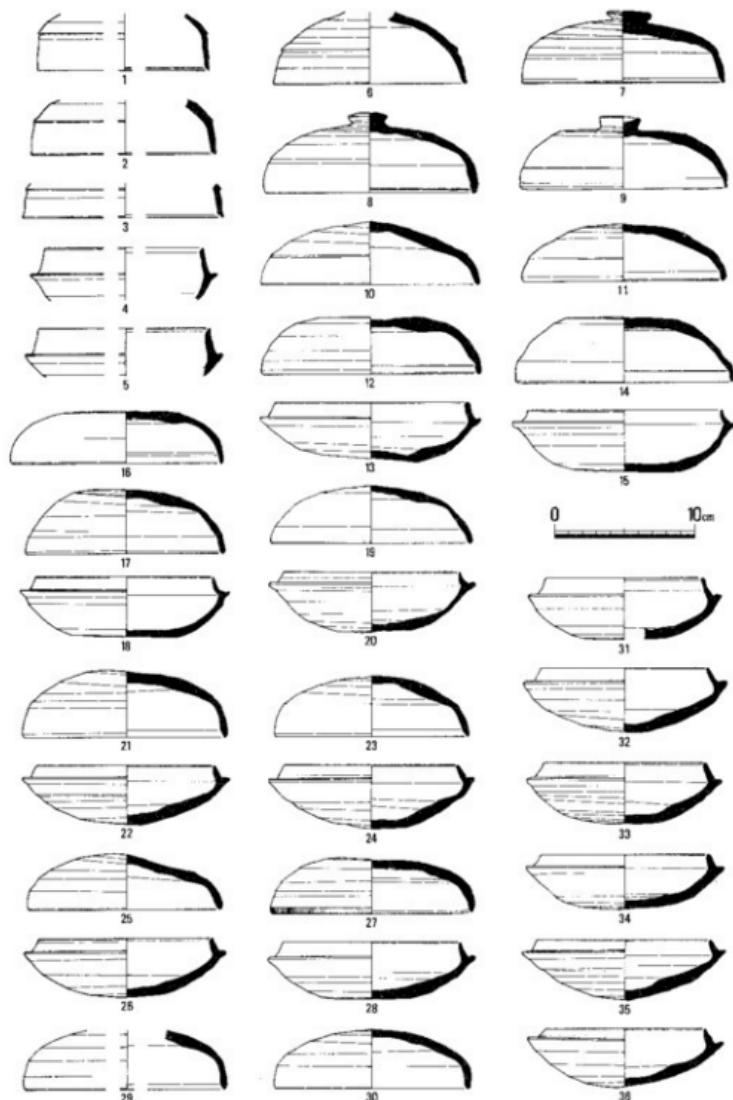
出土点数が多く、種々雑多で個体差に富むが、説明上、また考察上から7種に分類する。なお、蓋と杯を上下に組み合わせて図示したものは、観察からセットの可能性の強いものである。

蓋杯1類 (1~5) 個体差が大きいため時期差や生産地の相違が明らかである。蓋は、天井部と口縁部の境に明瞭な稜をもち、口縁部に傾斜面をもつ。この面には沈線状の凹部がめぐる。杯は、たちあがりが斜上方へ長く伸びて先端に傾斜面をもち、受部は短く斜上方へ突出する。蓋・杯ともにヘラ削りは丁寧で、広い範囲に及ぶ。内面は滑らかである。

蓋杯2類 (6~11) 個体差が大きい。6は87のような高杯である可能性が強く、7~9は高杯の蓋であり、一群とすることには若干無理もある。対応する杯はみつかっていない。天井部と口縁部が円線か長い段で明瞭に分けられる。口縁端部は丸くおさめるが、内面に沈線あるいはかすかな段のつくものがある(7・8)。天井部内面には仕上げナデがなされる。9は口クロが左回りで、内面の仕上げナデも認められず、つまみの形態からみても異質である。

蓋杯3類 (12~20) 変化に富み、法量からも時期幅が想定される。蓋は内面に口縁部を明瞭にする段あるいは屈折を認める。杯は、内面のたちあがりと底部の境界が屈折し、各個形態を異にする受部は短く斜上方へ突出する。蓋・杯ともにヘラ削りの範囲は狭い。内面中央に同心円文を残すものが多く、仕上げナデは簡略である。ただ、19・20のみは丁寧な仕上げナデがなされている。14と15は蓋を反転させて杯にのせて焼成したものである。

蓋杯4類 (21~36) 法量からみればかなりまとまりをもっているが、形態的には微妙に差異が認められる。蓋は、天井部と口縁部の境が不明瞭になり、屈折による鈍い棱線をとどめるにすぎない。口縁端部の形態には、丸くおさめるもの(25・27・30)と傾斜面をもつもの(21・23・29)がある。杯は、たちあがりが内傾して先端が薄くなつて丸くおさめられ、受部は短くて上面が水平面または凹面となる。たちあがりと受部の境が溝状になるもの(24・28・31・33・35)がある。杯外面の受部以下は滑らかで、屈折的ではない。内面も滑らかで、たちあがりと底部の境界線の不明瞭なものが多い。蓋・杯とともにやや厚手のつくりで、ヘラ削りは1/2前後に及び、内面には多く仕上げナデがなされている。ただ、仕上げナデの緻密についてはかな



第15図 出土遺物（1） 須恵器（1） ($S = 1/4$)

りばらつきがある。砂質の胎土のものが多い。

蓋杯5類 (44~55) 形態・胎土・焼成等の諸点からみて、明らかに同一窯の製品と考えられる。焼成はきわめて良く、堅くしまっている。色調は黒色系を示すものが多い。自然釉が多量に付着している。ヘラ削りの範囲は1/3近くに縮少している。内面中央には同心円文が残るが、仕上げナデはみられない。蓋は、口縁部が直立かやや内側に屈折する。杯は、たちあがりが垂直に近く立って先端を尖り気味におさめ、受部は直線的に斜上方へ伸びる。杯外面の受部以下は滑らかであるが、内面の立ち上がりと底部の境は屈折的で明瞭な線をもつている。44と45、46と47は組んだ状態で焼成されたものである。

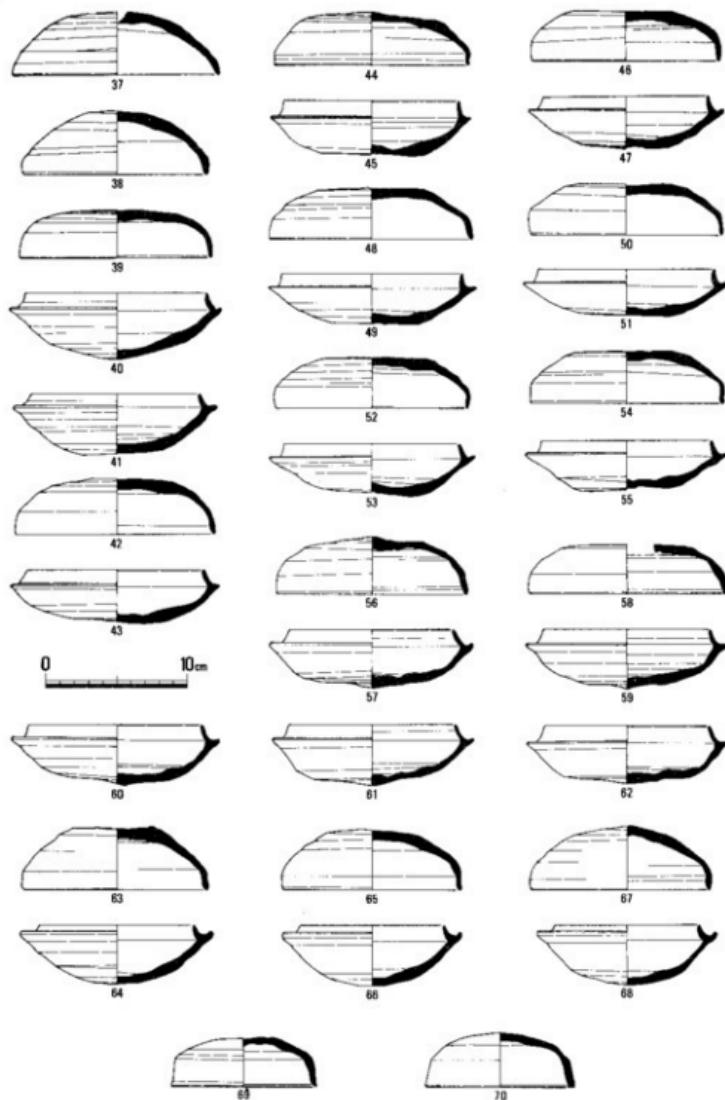
蓋杯6類 (56~62) この一群の土器も諸特徴が一致することから同一窯の製品である。胎土には多量の砂粒・石粒が含まれているが、白色砂粒が特に目につく。器形では天井部・底部の突出が特徴である。ヘラ削りは粗雑で削り残しが多く、1/2以下の範囲でなされている。内面には螺旋状の凹部が明瞭で、仕上げナデは施されていない。蓋は、口縁部と天井部の境が不明瞭で鈍い稜をなすにすぎず、口縁端部は一段薄くなつて、内面にかすかな段を認める。杯は、たちあがりがわずかに外反りに内傾し、受部は内湾している。杯外面の受部から底部への移行は屈折的であり、内面のたちあがりと底部の境も同様で、明瞭な線をもつ。

蓋杯7類 (63~68) 上述の各類と比べ口径がひと回わり小さくなっている。蓋は、口縁部が屈折してわずかに外反し、天井部内面にごく軽い仕上げナデを施すが、67にはない。杯は、たちあがりが短く、強く外反する。受部も強く内湾するため、たちあがりから受部にかけて、幅広い溝がつくられる。内底面の仕上げナデのないものが2点(66・68)ある。内面のたちあがりと底部の境は強く屈折する。天井部・底部には小範囲のヘラ削りをするが、その後にナデで調整するものもあり、多くは丸く仕上げられている。この類の胎土には砂粒・細砂が多く含まれ、色調は灰色から淡青灰色を呈す。

なお、37~43については、それぞれ上述の7類型といくつかの点で異なり、どれにも属せられなかった。37は4類に似るが、ヘラ削りの範囲が広く、口縁部と天井部の境が幅広い凹部になっている。38は7類に近いが、ヘラ削りは広く、口縁部と天井部の境に凹線をめぐらせ、天井部内面は丁寧に仕上げナデされている。39も4類に近いが、器高が低く、天井部内面に同心円文がかすかに残る。40・41も4類に似ているが、たちあがりと受部の形態が異なる。42と43は胎土・焼成・色調が5類と酷似しているが、ヘラ削りの範囲が広く、内面中央に仕上げナデがみられ、5類と同系統の窯でつくられた一時期古いものと考えられる。

また、短頸壺の蓋も二点出土しているが、69は2類に、70は7類に近似する。ただ、69には天井部と口縁部との境の凹線ではなく、70の天井部は不定方向のヘラ削り後ナデしている。

壺 (71~84)



第16図 出土遺物(2) 須恵器(2) ($S = 1/4$)

さまざまな器形がみられ、大きさにも変化があるが、大形のものには破損品が目立つ。

脚付壺 (71・75・76) 71の図は脚の4ヶ所の破片から復元接合したもので、かならずしも完全ではない。とくに脚端部については疑問があるが、胎土・焼成・色調から同一個体と判断した。71は装飾壺であろう。脚と壺の接合部には刻目突帯をめぐらせ、脚は方形の透孔と櫛描波状文で飾っている。75は口縁部を欠く。肩部にカキ目を施し、底部はヘラ削りしている。透孔は三方にあいている。76は直口壺で口縁端部に内傾面をもつ。やはり透孔は三方向である。脚端部は丸く丸い。脚裾部の2/3を欠損している。

広口壺 (72・73) 72は広口壺の胴部片であろう。焼成がきわめて良く、堅緻で、備前焼のような暗褐色を発している。73は胎土・焼成・色調さらに多量の自然釉の付着が蓋杯5類と酷似している。肩部に二条の沈線をめぐらせ、底部は平底風につくられている。外面に融着した杯を打ち欠いて使用している。口縁部の1/4は失われている。

脚付有蓋壺 (74) 透孔のある脚部は欠失している。頸部は長く、沈線二条で挟まれた区間に櫛描波状文を飾る。頸部から底部までカキ目を多用し、その後にヨコナデで調整している。口縁のたちあがり先端は丸くおさめられ、受部の上面は水平になっている。

直口壺 (77～79) 77も胎土・焼成等が蓋杯5類と酷似している。口縁端部は尖り気味に丸くおさめ、肩部に沈線をめぐらせる。78と79はよく似た形態をし、ともに肩部に二条の沈線をめぐらせ、頸部にもごく浅い線を認める。ただし、胎土・焼成・色調は異なっている。

短頸壺 (80～84) 直口で口縁端部を丸くおさめるものと、頸部を外反させて、口縁部を肥厚させるものがある。80と81は肩部にカキ目を施し、底部内面には仕上げナデがなされている。82は肩部に二条の沈線をめぐらせ、内面は口縁部以外不定方向のナデで調整している。胎土は蓋杯6類と近似しているが、ヘラ削りは丁寧である。83も胎土・焼成・色調やヘラ削りの様子から蓋杯5類と同じ窯で焼かれた可能性が高いが、底部内面に放射状の仕上げナデがみられ、42・43と共に共存したことも考えられる。84は肩部にカキ目を施すが、その後にヨコナデを外面全体にわたって行う。内面の仕上げナデはみられない。

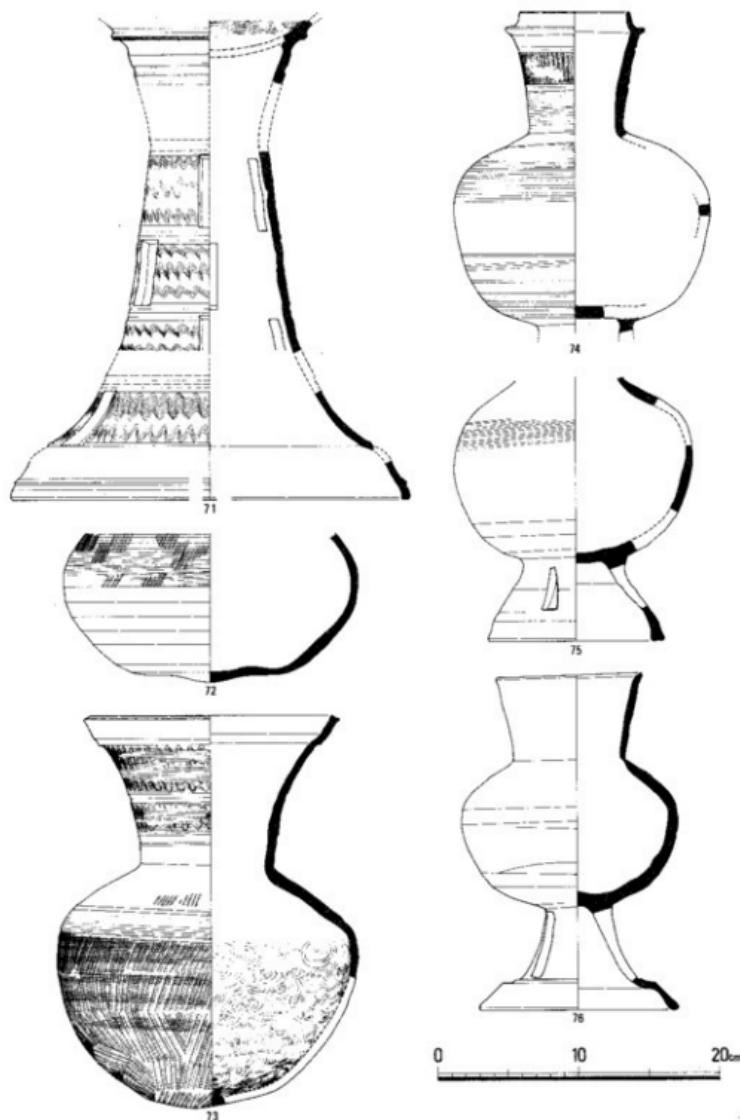
椀 (85)

直口で、口縁端を尖り気味に丸くおさめる。体部に三条のかすかな沈線をめぐらせ、下半にはカキ目が残る。底部はヘラ削り後、ナデている。胎土・焼成等が蓋14・杯15とよく類似し、同一窯製の可能性がある。

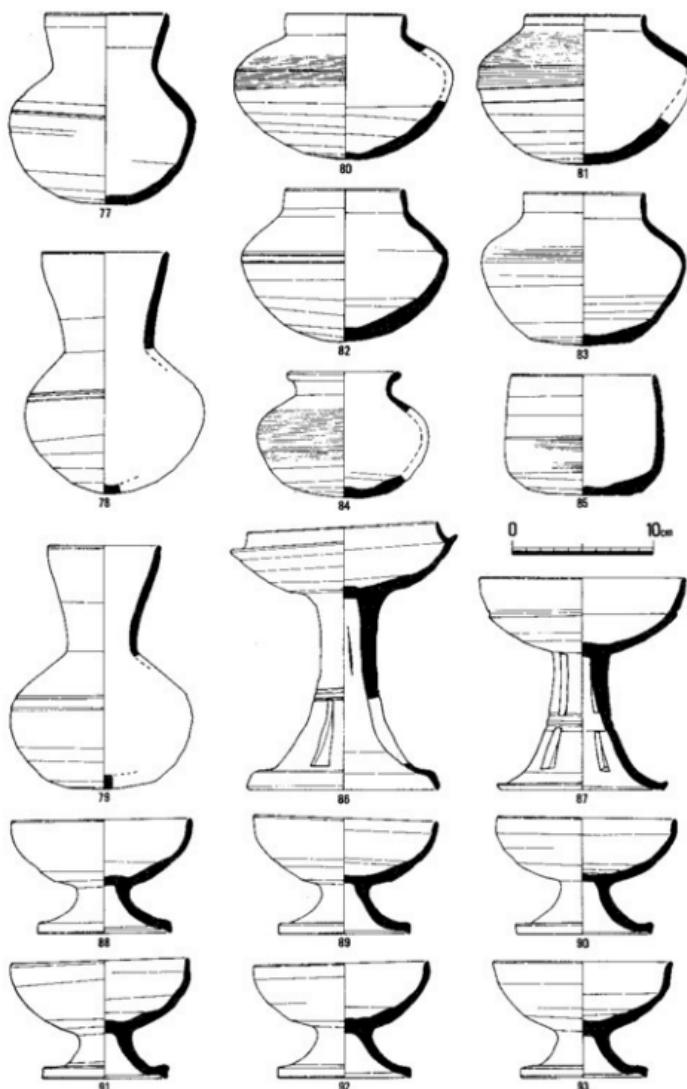
高杯 (86～93)

有蓋と無蓋の二種があり、脚も長脚と低脚がある。

長脚有蓋高杯 (86) 杯部は蓋杯3類に近い。内底面には円心円文が残り、仕上げナデはない。脚は凹線で二段に分けられ、三方向の透孔を上下でずらせて飾る。上段の透孔は細く、不



第17図 出土遺物（3） 須恵器（3） ($S = 1/4$)



第18図 出土遺物(4) 須恵器(4) ($S = 1/4$)

完全な穿孔である。脚端は内湾させ、先端を尖り氣味におさめる。脚部下半の1/2を欠く。

長脚無蓋高杯 (87) 杯部は口縁部と底部の境に鈍い稜をもち、内底部には仕上げナデが施され、蓋杯2類に類似する。ただ口縁部は軽く外反し、内面に小さな段をめぐらせている。脚部は凹線で二段に分け、透孔を二方向に、上下連続させて施す。脚端はつまみ出したようになっている。胎土・色調・焼成は蓋杯5類に似るが、自然釉をみない。

短脚無蓋高杯 (88～93) 蓋杯7類の蓋を反転させ、脚をつけたものである。内底面には仕上げナデをみない。脚端は一度外折させ、端面下端をつまみだす。いずれもほぼ同形であるが、細かくみれば二分できる。一つは、胎土がきわめて砂質で、焼成の良好なもの。一つは、焼成がやや付く、口縁部内面が屈折するものである。前者は91～93、後者は88～90である。

平瓶 (94～97)

四種四様で、お互いに類似点をほとんどもたない。94は大形で、肩部に突起を対で貼付ける。焼成はきわめて良好で、緑色の自然釉が美しい。胎土・焼成・色調が碗85とよく類似している。95は頸部と肩部に凹線らしきものがめぐり、胴部上面には同心円状のカキ目がかすかに残っている。やや厚手のつくりである。96は焼成や色調、それにヘラ削りの様子から蓋杯5類との類似が認められる。ただ、自然釉は少ない。97は口縁部が胴中央に近く付き、やや異形である。白色砂粒を多量に含む胎土や狭いヘラ削りと底部の突出に、蓋杯6類との類似がみられる。

趣 (98・99)

個体差が大きく、類似点をみない。98は自然釉が多量に付着し、胎土・焼成・色調から蓋杯5類との類似が明らかである。99は頸部と肩部に沈線による装飾を施している。底部は手持ちのヘラ削りである。胎土・焼成等が蓋杯7類に酷似している。

提瓶 (100～106)

大きさや、体側の耳の形状、カキ目の施文場所など、各個体とも変化に富む。100は大形で、耳は円環状を呈し、焼成・色調が高杯86とよく類似している。105は自然釉の付着は少ないものの、胎土・焼成・色調が蓋杯5類と酷似している。106は丁寧なつくりである。

横瓶 (107)

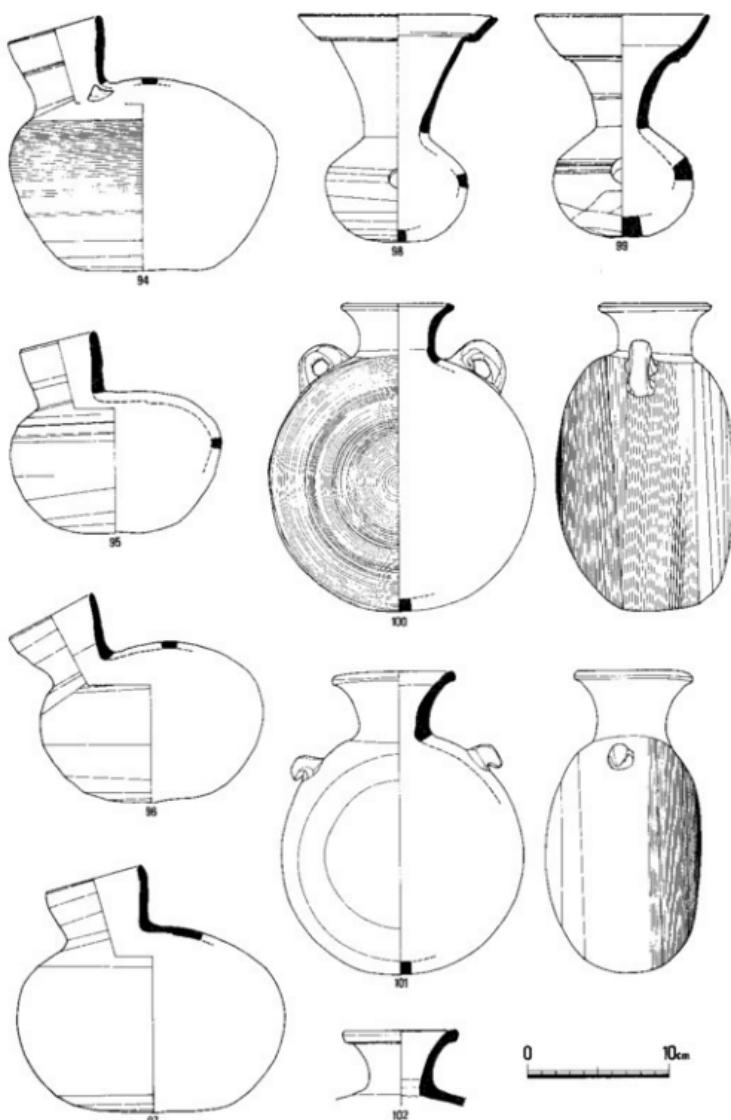
粗雑なつくりで、頸部には指頭圧痕が残る。胴部にも小さな凹凸があり、カキ目もところどころ空白がみられる。胴部にはかすかにタタキ目の痕跡が残っている。ヘラ削り部分の中央にはヘラ記号がある。焼成はやや甘い。

b. 土師器

三点出土しているが、須恵器の量と比較すればその差は圧倒的である。

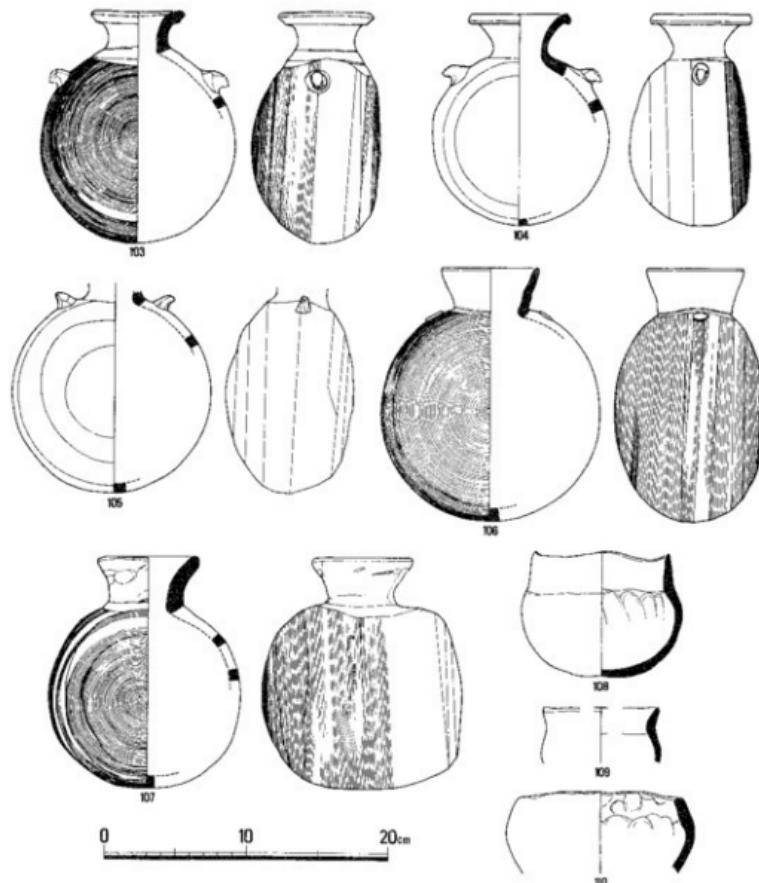
鉢形土器 (108～110)

108は口縁部が直んで緩い波状を呈する。内面の胴部上端には親指によるオサエの痕跡が明



第19図 出土遺物(5) 須恵器(5) ($S = 1/4$)

瞭に残る。胴部外面はオサエとナデ、その他はナデ調整である。胎土には砂粒多く、焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈す。109の胴部内面は丁寧なナデ調整だが、外面は粗雑である。胎土は石粒・細砂をかなり含み、焼成は良好。色調は淡黄褐色である。110は口縁部内面に指頭圧痕が顕著であるが、胴部には丁寧なナデを施している。胎土は砂粒多く、焼成は良。色調は外面が暗灰褐色、内面は赤褐色である。



第20図 出土遺物（6） 須恵器（6）・土師器（S = 1/4）

3. 金属器 (第21図 図版31・32)

鉄器と銅器がある。19点を図示したが、いずれも小形のもので、刀剣や甲冑・馬具などのような大形品はみられなかった。このことは、土器の出土量と比較した場合いさか奇異に感じられ、盗掘の影響かとも考えられる。しかし、床面の玉砂利上にあった鉄器は四点にすぎず、玉砂利の残存範囲からすれば、この鉄器の僅少さが本古墳の特徴とみられる。

a. 鉄器 用途で分ければ、農具・工具・武具・装身具があるが不明品も3点ある。

鎌 (111・112) 刃先と根の部分が玄室埋土中から出土している。刃の幅や背の厚さから同一個体の可能性が強い。根の部分は断面が三角形で、尻は折り返した痕跡を残している。柄の木質が付着残存していて、柄と刃が鈍角になるよう装着されたことがわかる。また、表と裏では木目の方向が40°異なる、二枚の板を合わせて柄にしていたことも知られる。刃幅24mm、背厚4mmを測るが、根の部分は幅28mmと少し広くなる。

刀子 (113～115) 113は茎尻を欠いているが完形に近い。身部74mm、茎部40mm、背厚7.5mmを測る。身幅は根元で14mm、茎幅は12mmで背側の闊は明瞭である。刃側の闊は欠損するが、あった可能性が強い。茎には木質と鈎角が残存している。114は茎尻で木質が付着している。幅14.5mm、厚さ4mmである。115は身部で先端を欠いている。刃幅15mm、背厚6mmを測る。

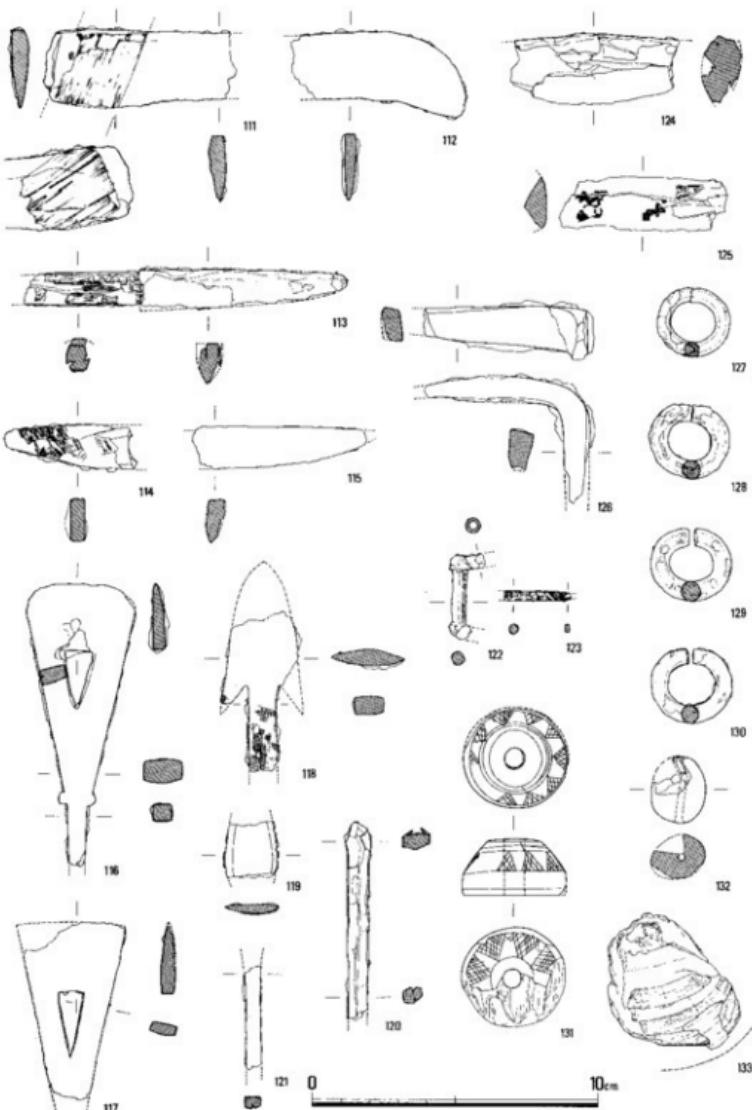
鎌 (116～121) 116・117は扁形の鎌で身部中央に透孔をもつ。116は茎まで残存し、身と茎の境に小突起をもつ。116の身部は茎にむかって厚味を増すが、117は扁平である。116は残存長100mm、身部長75mm、刃幅38mm、身部厚9mmである。117は残存長64mm、厚さ5mmを測る。118は棘のついた三角形の鎌である。茎は太く、しっかりしている。残存長52mm、身部厚6mm、茎部幅10mm、茎部厚8mmである。119は両側に刃をもつようで、鎌とみられる。幅20mm、厚さ5mmである。120・121は細根式鎌で長い頸部の先に小さな身部をもつものである。120は身部が残存している。闊はなく、残存長72mm、頸部幅7mmを測る。121は頸部であろう。

帶金具 (122・123) 122は残存部分の形からみれば鉤具のように考えられるが、帯を巻きつける部分に木質のようなものが付着している。金具の幅は30mm、帯幅は19mmを測る。123も鉤具の中央の針かと思われるが、何かが巻きついているため疑問もある。残存長は23mmである。ともに玄室の床面から出土している。

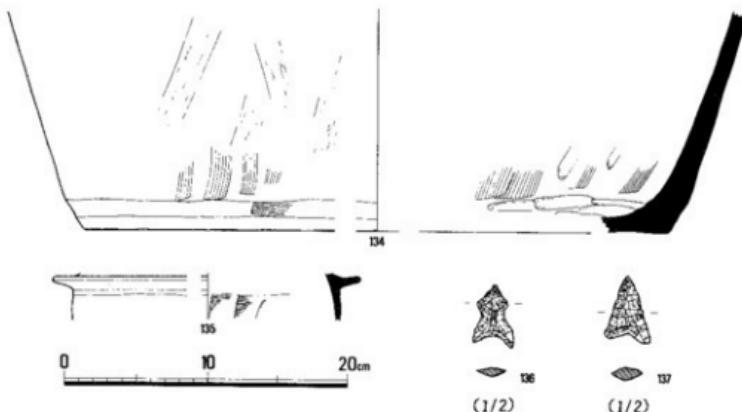
不明品 (124～126) 124は刃と背があるようにみえるが、中央がもっとも厚くなっている。125も刃をもつようだが、片面が荒れて判然としない。126は板状で直角に曲げられている。3点とも埋土から出土している。

b. 銅器 四点出土している。すべて耳環で、床面から出土したものはない。

耳環 (127～130) いずれも銹化が進んでいるが、127は金の被膜を残し、銅地金張りの金環とみられる。他の3点については金や銀の被膜は認められず、129などは表面があまり荒



第21図 出土遺物(7) 金属器・石器・貝 ($S=1/2$)

第22図 古墳に関係しない出土遺物 ($S = 1/4, 1/2$)

れていないことから、銅環の可能性もある。以下、計測値を記す。127は直径26mm、太さ5mm、重さ6.9g。128は直径29mm、太さ6.5mm、重さ8.5g。129は直径29.5mm、太さ7mm、重さ16.9g。130は直径29mm、太さ6mm、重さ11.1gである。

4. 石器（第21図 図版32）

紡錘車と玉の二点があり、玉は床面から出土している。

紡錘車（131） 上面直径20mm、底面径35mm、高さ20mmで、底面と側面には文様帯を設け、格子で埋めた鋸歯文を並べている。滑石製で、重さは37.3g。かなり損傷している。

棗玉（132） 琥珀製である。長さ23mm、幅19mm、重さ3.1gを測る。両側穿孔である。

5. 貝（第21図 図版32）

羨道の閉塞石縁辺の土器群の下から図示したもの（133）が出土し、また、同じく羨道の床面にみられた炭化物の薄層下からも一点出土した。二枚貝の破片で、ハマグリのようである。

6. 古墳に関係しない遺物（第22図 図版32）

土器（134・135） 134は備前焼の大甕である。底部付近の破片のみで、接合しても復元できるまでにはならなかった。底面はナデ、胴部下端は板状工具、それより上方はナデで調整され、擦痕が認められる。内面の底面周縁は強くナデされている。胎土は砂粒・石粒多く、焼成は良好、色調は暗灰褐色を呈す。135は羽釜である。灰黄色土中より出土した。内面の上半はナデ、下半は板状工具による調整である。胎土は細砂が多く含み、焼成良好で灰褐色の色調である。小片で径は計測できなかった。

石器（136・137） ともにサヌカイト製の打製石器である。136は無茎凹基の五角形鐵で、両側を抉っている。全長21.5mm、厚さ4mm、重さ0.7gを測る。羨道の閉塞石前方の埋土から出

第3章 調査の結果

土している。137は無茎凹基の三角形鐵で、全長23mm、厚さ4mm、重さ1.0gである。石室埋土の上方から出土している。2点とも弥生時代前期以前のものであろう。

註

(註1) 岡田博・浅倉秀昭「横見古墳群」『中國縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15 岡山県教育委員会 1977年

(註2) 福田正繼『龍王塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告58 岡山県教育委員会 1984年

須 惠 器 觀 察 表

番号	器種	法 直 (mm)	胎 土	燒成	色 調	ヘテロトピア ガラス	残存率	出 上 位 蓋	開 古 時 期 号	備 考
1	蓋	-	細砂かなり	良	灰 黑紫色	?	?	小破片	壇田灰黑色上	-
2	蓋	-	精 良	良	灰 灰褐色	?	?	小破片	玄室理上	-
3	蓋	-	細砂かなり	良	灰 黑灰色	?	?	小破片	鏡面理上	-
4	杯	-	精 良	好	青灰黑色	?	?	小破片	石室理上	-
5	杯	-	精 良	好	青灰黑色	?	?	小破片	石室理上	-
6	無茎高杯	□ 135、高50	石粒砂粘かなり	良	灰 黑褐色～暗灰色	?	?	1/6	玄室理上	No.8
7	蓋	□ 143、高51	白色石粒多	良好型	暗灰色～灰黑色	1/6	有	形	玄室理上	No.5
8	蓋	□ 147、高57	砂粒細砂かなり	良好型	灰 色	左回	有	形	玄室床面	No.63
9	蓋	□ 146、高515	砂粒細砂多	良好型	灰 黑灰色	右回	無	形	玄室理上	No.33
10	蓋	□ 152、高45	石粒砂粘かなり	良	灰 青灰色	左回	有	一部無	西井理上、玄室理上	No.9
11	蓋	□ 142、高40.5	砂 粉 多	良	灰 灰色	右回	有	形	玄室床面	No.67
12	蓋	□ 153、高40	砂粒細砂かなり	良好型	灰灰褐色～灰白色	左回	有	形	玄室理上、支室理上	No.41
13	杯	□ 156、高45	砂粒細砂かなり	良	灰 灰褐色～暗灰色	左回	半	1/6	玄室理上、支室床面	No.3-105/106[12とセットか]
14	蓋	□ 154、高 65	砂粒細砂多	良	灰 灰色	左回	無	形	玄室理上	No.113
15	杯	□ 158、高 44	砂 粉 多	良好型	灰 灰色	左回	有	形	玄室床面	No.62
16	杯	□ 147.5、高37	砂粒細砂多	良	灰 灰色	左回	半	1/6	玄室床面	No.99
17	蓋	□ 128、高46	砂粒がなり	良	灰 淡灰褐色～灰褐色	左回	有	光 形	玄室床面	No.49
18	杯	□ 124、高43	砂 粉 多	良	灰 淡灰褐色～灰褐色	左回	半	1/6	玄室床面	No.59
19	蓋	□ 140、高 41	砂 粉 多	不 良	灰 灰色	左回	無	形	鏡面石下	No.8507
20	杯	□ 124、高 45	砂粒細砂かなり	良	灰 淡灰褐色	左回	有	光 形	鏡面石下	No.91
21	蓋	□ 141、高 48	石粒砂粘合	良好型	灰灰褐色～灰黑色	左回	有	光 形	玄室床面	No.65
22	杯	□ 125、高 42	細砂かなり	良	灰 灰色	左回	有	光 形	鏡面石下	No.89
23	蓋	□ 136、高 43.5	砂粒細砂かなり	良	灰 灰色	左回	有	光 形	玄室理上	No.112
24	杯	□ 122、高 45.5	砂粒細砂多	良好型	灰 灰褐色～灰黑色	左回	半	1/6	天井にへら記号	No.4
25	蓋	□ 134、高 41	石粒砂粘かなり	良	灰 灰色	左回	有	光 形	鏡面石下	No.83
26	杯	□ 121、高 43.5	石粒砂粘かなり	良好型	灰灰褐色	左回	半	1/6	鏡面石下	No.40
27	蓋	□ 141、高 40	砂粒細砂かなり	良好型	灰灰褐色～灰黑色	左回	有	光 形	玄室床面	No.74
28	杯	□ 125、高 40.5	石粒砂粘かなり	良好型	灰灰褐色～灰黑色	左回	有	光 形	鏡面石下	No.56
29	蓋	-	精 良	好	青素色	?	?	1/6	玄室床面	-
30	蓋	□ 136、高 42	石粒砂粘合	良好型	灰 黑紫色	左回	有	光 形	玄室理上	No.37
31	杯	□ 112、高 40.5	砂 粉 多	中や精	灰 灰色	左回	半	1/6	鏡面石下	No.8512
32	杯	□ 119、高 45	石粒砂粘合	良好型	灰白色～灰褐色	左回	有	光 形	玄室床面	No.14
33	杯	□ 115、高 43.5	石粒砂粘合	良好型	灰灰褐色	左回	半	1/6	鏡面石下	No.42
34	杯	□ 120、高 39	砂粒細砂含む	良好型	灰 灰色	左回	有	光 形	玄室床面	No.102
35	杯	□ 124、高 43	石粒砂粘合	良好型	灰 灰色	左回	有	光 形	鏡面石下	No.44
36	杯	□ 114、高 42	砂 粉 多	良好型	灰白色～灰褐色	左回	半	1/6	玄室床面	No.2
37	蓋	□ 144、高 44.5	砂粒細砂多	良	灰 黑灰色	左回	有	光 形	玄室理上、鏡面床面	大きく重む No.10-81
38	蓋	□ 127、高 45	石粒砂粘多	良好型	灰 灰色	左回	半	1/6	玄室床面	No.64
39	蓋	□ 134、高 34	砂粒細砂なり	良好型	暗褐色	左回	半	1/6	玄室理上	No.17-29
40	杯	□ 127、高 47	砂粒細砂かなり	良好型	灰 灰色	左回	半	1/6	玄室床面	No.60
41	杯	□ 118、高 43	石粒砂粘合	良好型	灰 灰色	左回	半	1/6	玄室床面	No.65
42	蓋	□ 139、高 39	砂粒細砂かなり	良好型	灰黑褐色～暗青色	左回	有	光 形	鏡面石下、埋土、開	No.87-88
43	杯	□ 124、高 38	石粒砂粘かなり	良	灰 黑色	左回	有	光 形	鏡面石下	No.3-8508
44	蓋	□ 136、高 38	精 良	好	青灰黑色	左回	半	1/6	玄室床面	No.101
45	杯	□ 123、高 39	精 良	好	青灰黑色	左回	半	1/6	玄室床面	No.50
46	蓋	□ 132、高 35.5	砂粒かなり	良好型	灰 灰色	左回	半	1/6	玄室床面	No.54
47	杯	□ 116.5、高 37	砂粒細砂かなり	良好型	暗褐色～黑色	左回	半	1/6	玄室床面	No.34
48	蓋	□ 142、高 36.5	砂粒細砂多	良	青 灰色	左回	有	光 形	鏡面床面	No.88
49	杯	□ 126、高 36	砂粒細砂多	良好型	暗褐色	左回	有	光 形	鏡面石下、玄室理上	No.15-23

須恵器観察表

50	蓋	口134.5、高36	精 良	良好堅 砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 褐色～黒色	伝 罫	無	一堅 彩	玄室埋七	N. 36	天井内面同心円文
51	杯	口125、高33.5					山	無	高造埴土、玄室埋土		N. 9-12+25)	50とセットか
52	蓋	口134、高36		砂粒細砂多なり	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	透 罫	光 彩	良室床面		N. 53	天井内面同心円文
53	杯	口123、高37		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	山	無	良室床面		N. 52	四隅内凹、52とセットか
54	蓋	口135、高37		細 砂 多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色～暗灰色	透 罫	無	玄室埋土		N. 104	天井内面同心円文
55	杯	口125、高35.5		細 砂 多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	透 罫	無	良室床面		N. 70	同心円文、54とセットか
56	蓋	口132、高41		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色～青灰色	伝 罫	無	透造床面		N. 97	
57	杯	口114、高41		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	透 罫	無	透造床面		N. 94	55とセットか
58	蓋	口138、残高34.5		砂粒細砂多	良 好	良 好	透 罫	?	透	透造床面・床面、間	N. 8501+8502	
										墓石下	8503+8513	
59	杯	口118、高42.5		砂粒細砂多	良 好	良 好	伝 罫	無	透	透造壁上・床面、附	N. 8509	58とセットか
										墓石下	-	
60	杯	口121.5、高43		砂粒細砂多	良 好	良 好	左回	無	透	透造床面	N. 98	
61	杯	口116、高43		砂粒細砂多	良 好	砂透灰～灰褐色	伝 罫	無	透	透造床面	N. 95	
62	杯	口115、高41		砂 砂 多	良好堅 灰 色	良好堅 砂透灰褐色	透 罫	無	透	透造床面	N. 95	
63	杯	口121.5、高45		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	無	透	玄室埋土	N. 32	
64	杯	口105.5、高42		砂 砂 多	良 好	良 好	右回	透	透	玄室埋土	N. 16	63とセットか
65	蓋	口123、高43		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	右回	透	透	玄室床面	N. 61	
66	杯	口100、高43		砂粒細砂多	良 好	良 好	左回	無	透	透造壁土	N. 22	65とセットか
67	蓋	口126、高45		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	左回	無	透	玄室床面	N. 68	
68	杯	口102、高42.5		砂粒細砂多	良 好	良 好	左回	無	透	透造壁土、玄室埋土	N. 30	67とセットか
69	蓋	口102、高35		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	左回	有	透	玄室埋土	N. 24	
70	蓋	口104、高38.5		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色	左回	有	透	玄室床面	N. 55	
71	脚付 盆			組 砂 多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 黑色～赤紫色	左回	無	透	横頭に黄色上、溝道	-	
72	盃	腹210		砂粒細砂多なり	良好堅	暗褐色	左回	一	透	玄室埋土		
										灰褐色土、黄透・玄	N. 13+8505	
73	広口 盆	口120、腹214、透279		砂粒細砂多わざか	良好堅	黑色～暗紫色	-	-	透	半埋土、隙窓右下	N. 8506+8511	
74	有底圓筒	口76、腹183、透229		砂粒若干砂細多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色～灰褐色	-	-	透	透	N. 38	
75	脚付 盆	腹170、脚122、残底		砂粒細砂多なり	良好堅	暗褐色～灰黑色	左回	透	透	玄室床面	N. 46	
										脚頭	N. 75	
76	脚付 盆	口102、腹154、脚137		砂粒粗粒合	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色～褐灰色	伝 罫	透	透	玄室床面	N. 45	
77	直口 重	直口 重240										
78	直口 重	口186、腹133、高135		砂粒・砂粒多	良好堅 灰 色	良好堅 灰黑色～褐灰色	右回	一	白1/4次	玄室埋土	N. 39	
79	直口 重	口186、腹128、高171		砂粒細砂多	良 好	良 好	右回	一	完 彩	透造床面	N. 92	
80	傾 頂 容	口78、腹153、高173		砂 砂 多	良 好	良 好	右回	透	透	透造床面	N. 86	
81	傾 頂 容	口83、腹154、高166		砂粒細砂多	良 好	良 好	右回	有	透	玄室埋土	N. 107	
82	傾 頂 容	口83、腹153、高108		砂粒細砂多	良 好	良 好	右回	透	透	玄室床面	N. 73	
83	短 頂 容	口84、腹145、高109		砂 砂 多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色～暗灰色	右回	有	透	透造床面	N. 90	
84	短 頂 容	口77、腹122、高90		砂粒細砂多	良好堅 灰 色	良好堅 灰 色～暗褐色	右回	透	透	土器、玄室埋土・床	N. 7-	
85	瓶	口101、底85.5		砂粒細砂多なり	良好堅	灰褐色	右回	一	透	玄室床面	N. 69	
86	有蓋高杯	口134、腹134、高191		砂粒細砂多	良好堅	灰褐色	右回	透	透	透造床面	N. 82	大きさ重心
87	無蓋高杯	口144、腹114、高152		砂粒細砂多	良 好	灰褐色～灰褐色	脚下部	透	透	玄室床面	N. 47	
88	無蓋高杯	口127、腹94、残81		砂粒細砂多	良 好	灰白色～淡灰色	右回	透	はね形	玄室埋土	N. 18+20	
89	無蓋高杯	口125、腹92、高85		砂粒細砂多なり	良 好	灰 色	右回	透	透	玄室床面	N. 76	
90	無蓋高杯	口125、腹94、高85		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	玄室床面	N. 58	
91	無蓋高杯	口125、腹94、高85		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	玄室埋土	N. 76	
92	無蓋高杯	口125、腹92、高86		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	玄室埋土	N. 27	
93	無蓋高杯	口123、腹93、高86		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	玄室埋土・床面	N. 71	
94	無蓋高杯	口125、腹92、高86		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	玄室埋土	N. 57	
95	平 盆	口65、腹150、高102		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	玄室床面	N. 59	
96	平 盆	口66、腹153、高112		砂粒細砂合	良 好	灰 色	左回	透	透	透造床面	N. 72	
97	平 盆	口66、腹102、高176		砂粒細砂多	良 好	灰 色	左回	透	透	透造床面	N. 84	
98	碟	口135、腹102、底161		砂粒細砂多	良好堅	灰褐色	左回	透	透	透造床面	N. 110	
99	碟	口120、腹99、底158		砂粒細砂多	良 好	灰褐色～灰白色	右回	透	透	透造床面	N. 35	手持ちヘラ削り
100	碟	口71、腹188、高238		砂粒細砂合	良 好	淡青色～青褐色	右回	透	透	玄室埋土	N. 77	
101	提 扇 盆	口76、腹172、脚214		砂 砂 多	良 好	良 好	右回	透	透	透造床面	N. 45	幅厚110mm
102	提 扇 盆	口70、残高54.5		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	透造床面	N. 45	
103	提 扇 盆	口61、腹138、高83		砂粒細砂合	良好堅	灰褐色～灰黑色	右回	透	透	透	N. 80	幅厚91mm
104	提 扇 盆	口67、腹125、高49		砂粒細砂多	良好堅	灰褐色～暗褐色	右回	透	透	透	N. 109	幅厚85mm
105	提 扇 盆	口67、腹155、高179		砂粒細砂合	良 好	灰 色	右回	透	透	透	N. 111	幅厚90mm
106	提 扇 盆	口67、腹136、高164		砂粒細砂多	良 好	灰 色	右回	透	透	透造床面	N. 85	幅厚105mm
107	横 盆	口167、腹136、高164		砂粒細砂多	良 好	灰褐色～暗褐色	左回	透	透	透	N. 61	幅厚141mm

注) 法量の欄 口は口径、腹は腹径、脚は脚端径、高は器高、残高は残存高

第4章 まとめ

発掘調査の結果は第3章で述べた通りであるが、ここではその結果に基づいて、乙佐塚古墳の年代や埋葬状況、さらに被葬者の性格について、若干のまとめを行いたい。

考察を進める上で、出土した須恵器の編年が不可欠となるため、まずこれについて検討することとする。多量に出土し、かつ編年の基本とされる蓋杯について考え、以下他の器種に及ぶ。蓋杯は7種に分けたが、形態・技法から、3類を除く他の類は近似した時期のものからなっているとみられる。型式上もっとも古いものは1類である。ただ、1のように稜の鋭いものから、3の口縁部の短い、稜の鈍いものまで時期幅をもち、5世紀末から6世紀前葉にわたると考えられる。1類に続くものは2類であるが、3類の一部(12・13・16)も近似した時期であろう。6世紀中葉から後葉にかけての頃と判断される。次に4類が続くが、3類の残余も含む。4類は法量からみれば5・6類と近いが、より丁寧なつくりで、受部の形態なども古い要素を残している。6世紀後葉とみられる。5類と6類は技法や法量の類似から、ともに6世紀末と考えられ、4類に続いている。最後に位置するのが7類で、7世紀初頭と考えられる。以上のように、蓋杯は5期に分けられることになった。1類は1期、2類と3類の一部が2期、3類の一部と4類は3期、5類と6類が4期、7類は5期にあたる。なお、2～7類までを大阪府陶邑古窯址群(註1)での型式と対応させれば、2類はTK-10とTK-43の中間、4類はTK-43、5・6類はTK-209、7類はTK-209とTK-217の中間にあたるとみられる。前述の推定年代は最近の田辺昭三氏の試案(註2)に依っている。また、岡山県内の例と比較すると4類は稼山1期(註3)と対応し、7類は亀ヶ原1号窯(註4)(宮嶋1類)(註5)や稼山3期より若干先行するとみられる。

蓋杯の編年は上述のようになるが、本古墳から出土した須恵器のなかには、胎土・焼成・色調から、同一窯で作られたとみられる一群のものがあり、蓋杯と他の器種との同時性を考える上で有力な資料となっている。まず、蓋杯5類を焼成したA窯の製品として、73・83・96・98・105があり、蓋杯6類のB窯の産として82・97がある。蓋杯3類の14・15を焼いたC窯製品としては85・94があり、さらに86と100も同一のD窯製品と考えられる。したがって、ここに挙げられたものを指標として、各器種ごとに編年をすれば、出土須恵器全体を先の1～5期に分けることができる。ただ、備前地方における、古墳時代の須恵器窯の資料がほとんど知られていないため、今後、再検討すべき余地がある。以下、分類結果を記す。

1期 1～5 (5点) 2期 7～13・16・69・72・74・80・86・100・101 (15点)

3期 6・14・15・17～40・42・43・75・76・77・81・84・85・87・94・102～104・107 (41)

点)

4期 41・44～62・73・78・82・83・96～98・105 (28点)

5期 63～68・70・79・88～93・95・99・106 (17点)

それでは次に、出土した須恵器の編年とA～D窯の一群の製品の存在を資料として、埋葬状況について考えることとする。第3章で述べたように、玄室の奥の西壁側に木棺1基の存在を想定したが、その周囲の須恵器は2期から5期までのものが混在している。しかし、注意してみると、4期のものはこの周囲と閉塞石縁辺にしかみられず、さらにA窯製品がこの周囲に配置されていることがわかる。A窯製品の中には明らかに焼成時にセット関係にあったものが二組含まれ、C窯製の焼成時のセット品もあり、木棺の存在は疑いない。また、須恵器の中には朱の付着したものがみられるが、それらは8・11・17・39・41・44・47・48・63・76・80・84・86・98・107の15点で、48を除き木棺の周囲に集中している。この木棺が埋葬された時期は前述の状況から4期と考えられる。この4期の須恵器は閉塞石の縁辺にも密集していたが、その中にはA窯製品は1点しかなく、他の7点はすべてB窯製品で占められ、木棺周囲の須恵器とは対照的であった。この閉塞石縁辺の一群の須恵器の中にはC窯製品が1点あり、また、42と22は木棺周囲にある43・21とセットであった可能性が強い。このようなことから、木棺周囲と閉塞石縁辺の遺物は同一埋葬に伴うものと考えられる。

時期別の須恵器の分布状況をさらに検討すると、本古墳における埋葬は、前述の木棺1基だけではなかったことが推測される。まず、5期の須恵器の分布をみると、ほぼ玄室の前半分に集まっている。ここには棺台とおぼしき石もあり、このあたりに、もう1基の埋葬主体が存在していた可能性が強い。ただ、これに伴う副葬品は少なく、埋葬儀礼の規模が縮小したのではないかとみられ、注意される。

統いて、2期と3期の分布をみると、きわめて拡散している状況が認められ、必ずしも、4期の埋葬に伴うものだけではないようにみられる。これについては1期の存在が重要となる。1期は4期とは半世紀以上の時間差があり、4期の埋葬に伴うものとはみにくい。そして、不思議なことに、1期のものはすべて破片で出土していて、20片程ある出土量の1/3は表土や墳丘斜面の灰黄色土から出土している。このことは、1期の須恵器が埋葬儀礼の中で破壊され、墳頂に置かれた後に流出したことを想像させる。この1期の須恵器を被葬者が生前に使用したものと考え、2・3期の須恵器を副葬品とみれば、ここに1基の埋葬があったこととなり、これが本古墳における最初の埋葬で、その時期は6世紀の中葉から後葉にかけての頃と考えられる。3期の須恵器の量が多いのは、1回目と2回目の埋葬に共に使用されたからであり、4期の埋葬に2期・3期の破損品がみられるのは、1回目の副葬品を並べなおしたから、とするのはじつけだろうか。また、2類が蓋のみで杯をみないことや72の閉塞石下からの出土から、1回

目の副葬品はかなり搔き出されたことも考えられる。それにしても、1期と2期の間にはかなりの空白があるのは事実である。

さて、最後に、本古墳の被葬者の性格が問題となるが、それを雄弁に語るものは4期の埋葬である。そこにみられたA・B・C窯製品の一群は、被葬者が須恵器製作工人集団と密接な関係にあったことを示している。良港牛窓としては、他地域からの須恵器のまとまった搬入も考えられなくはないが、背後に邑久古窯址群を抱えている以上、むしろ6世紀中頃以降は、搬出が主であったように考えられる。特に4期の埋葬における、A窯製品とB窯製品の副葬位置の違いは興味深い。製品としては、胎土・焼成ともにA窯製品が勝っているが、それが棺周辺におかれて、B窯製品が羨道入口付近に積み重ねられているのである。もっとも、積み重ねられたのは5期の埋葬時の可能性もあるが、B窯製品には一点も朱の付着はみられず、当初から羨道入口付近に、まるで供献品のように置かれていたのは確かであろう。また、A窯と同系統で少し先行するとみられる窯の製品の出土（42・43）も被葬者が須恵器工人集団と関係していたことを裏付けるように思われる。

本古墳が『岡山県通史』の「乙佐塚」と同一である可能性は高いが、前方後円墳かどうかは再確認できなかった。かりにそうであったとしても、時期的には二塚山古墳と併行するとみられ、直接系譜として繋るとは考えられない。乙佐塚古墳はあまりに小規模である。むしろ、二塚山古墳の被葬者である大首長のもとで、須恵器工人集団の管理・統率にあたった人物であったのではなかろうか。墳丘規模のわりには多くの須恵器をもちながら、武器らしい武器を持っていないという特徴が示唆的である。今後は、邑久古窯址群内の窯跡出土品との比較検討が課題となろう。

註

- (註1) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年
- (註2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- (註3) 村上幸雄・森田友子『稼山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980年
- (註4) 西川宏・間壁忠彦『備前の古窯』『古代の日本』第4巻中国・四国 角川書店 1970年
- (註5) 伊藤晃『新林（宮崎）窯址の調査報告』邑久町教育委員会 1974年

図版 1



1. 乙佐塚古墳遠望（北から）

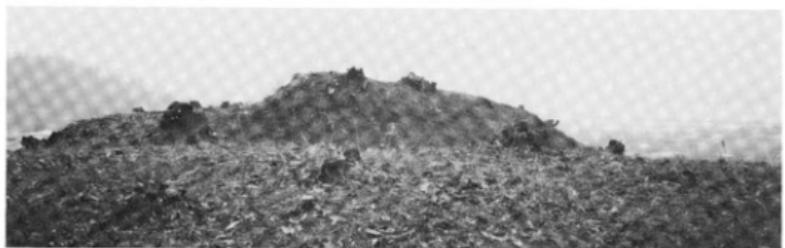


2. 乙佐塚古墳遠景（東から）

図版 2



1. 調査前墳丘（西から）



2. 調査前墳丘（北西から）



3. 調査後墳丘（北西から）



1. 墳丘全景（北から）

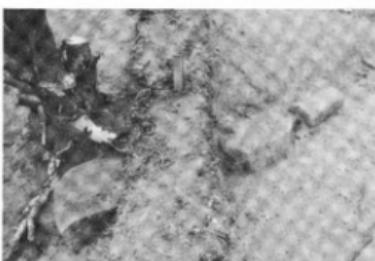
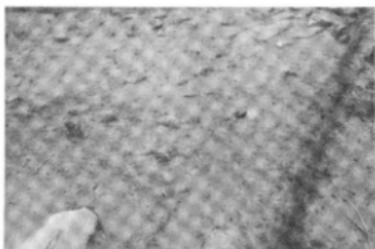


2. 調査後墳丘（北東から）

図版 4



1. 調査後墳丘 列石と墳端石（東から）



2. 列石（左・右上）と墳端石（右下）



1. 墳丘断面状況（北西から）



2. 墳丘北東断面（北西から）



3. 墳丘西断面（北から）

図版 6



1. 玉砂利検出面（北東から）



2. 第2次停止面（南西から）



3. 第3次停止面（南西から）



4. 第4次停止面（南西から）



1. 床面遺物出土状態（北東から）



2. 床面遺物出土状態（南西から）

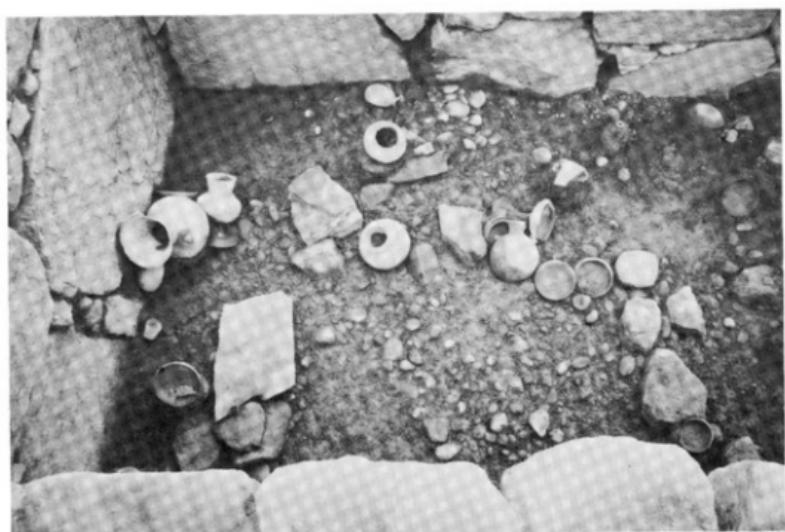
図版 8



1. 玄室床面遺物出土状態（南西から）



1. 玄室南半床面遺物出土状態（北西から）

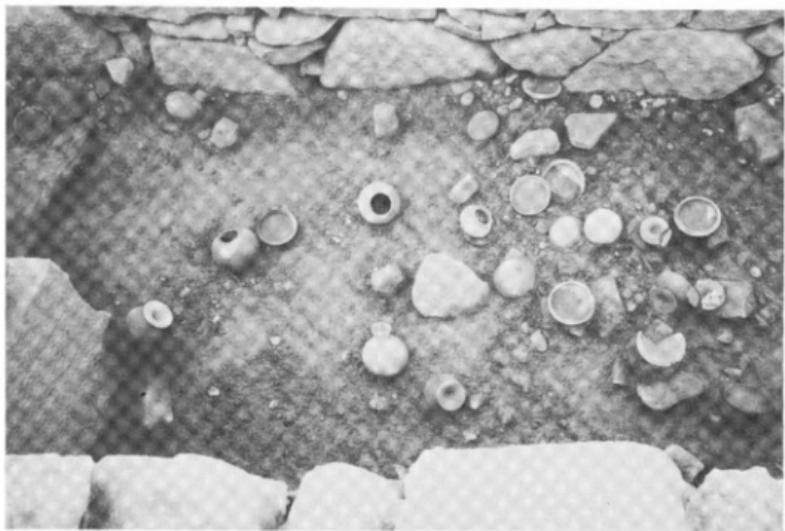


2. 玄室北半床面遺物出土状態（北西から）

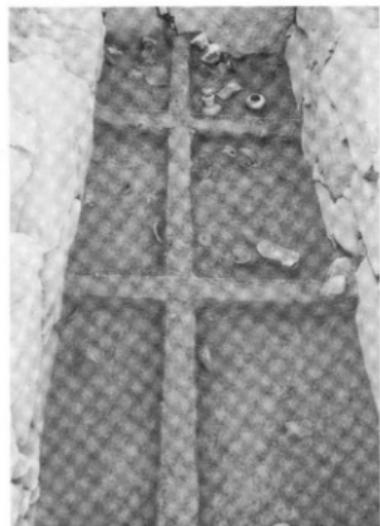
図版 10



1. 玄室北半床面遺物出土状態（南東から）



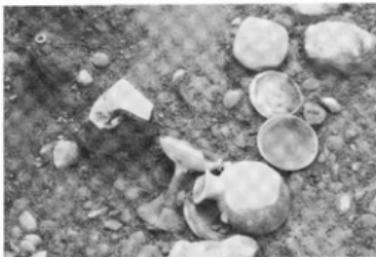
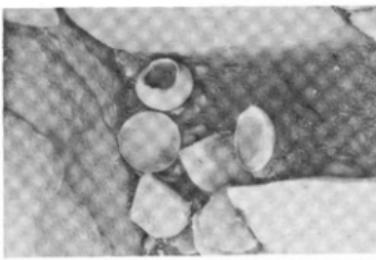
2. 玄室南半床面遺物出土状態（南東から）



1. 遺物検出状況（南西から）



2. 棺台周辺遺物出土状態（南西から）



3. 棺台周辺遺物出土状態細部

図版 12



1. 美道部床面遺物出土状態（北東から）



2. 玄室床面遺物出土状態（南西から）



1. 義道部閉塞石縁辺遺物出土状態（上方から）



2. 同 上 (北東から)

図版 14



1. 種道部上方遺物圧土状態(北東かご)



2. 陶器石築圧土状況(北東かご)



1. 閉塞石検出状況（南西から）



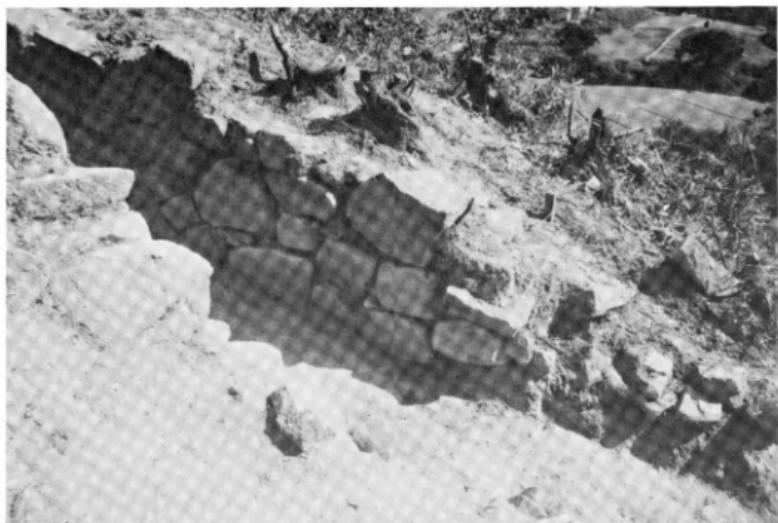
2. 玄室床面相合・玉砂利残存状況（南西から）



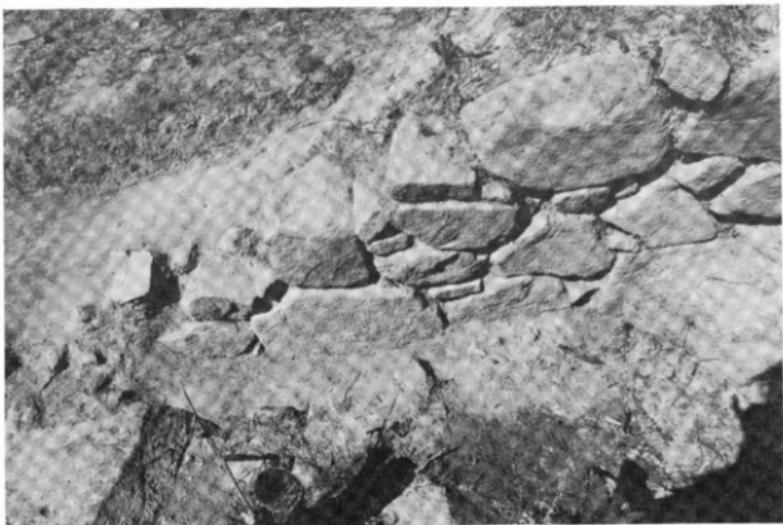
1. 玄室東側壁（北西から）



2. 玄室西側壁（南東から）



1. 羨道部東側壁（西から）



2. 羨道部西側壁（東から）

図版 18



1. 墓道（西から）



2. 同上（北東から）

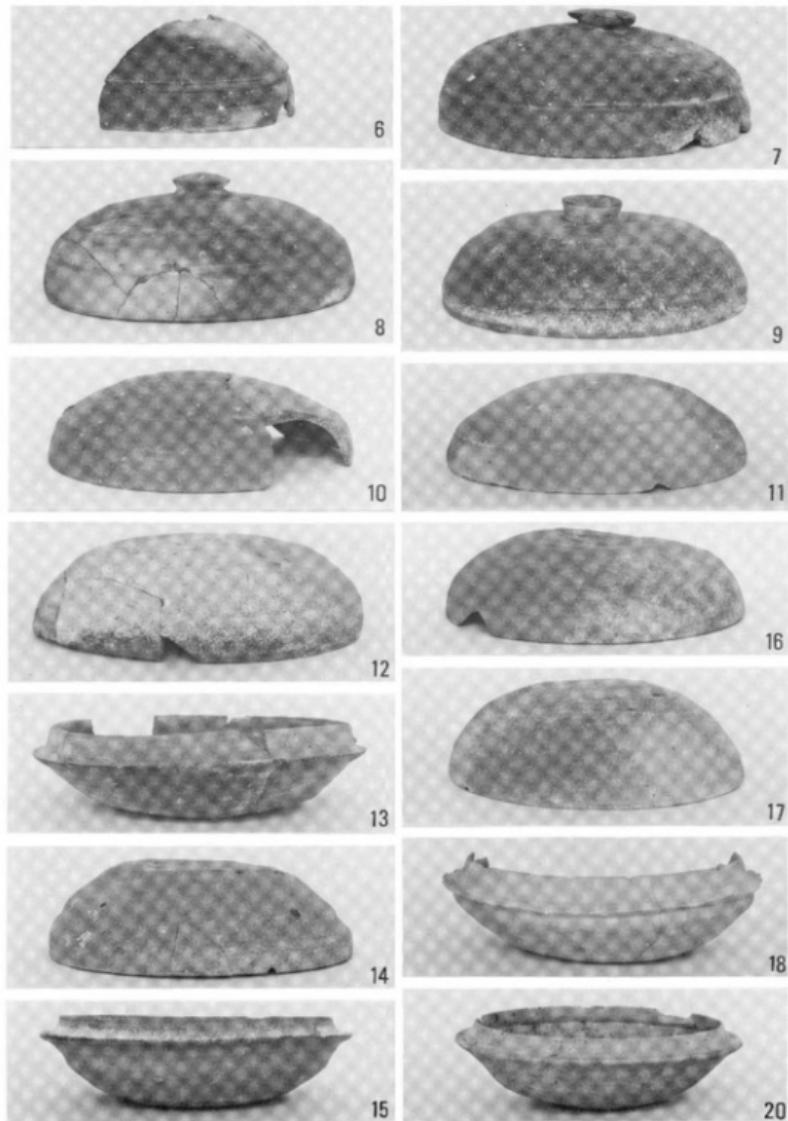


1. 玄室から見た羨道部（北東から）



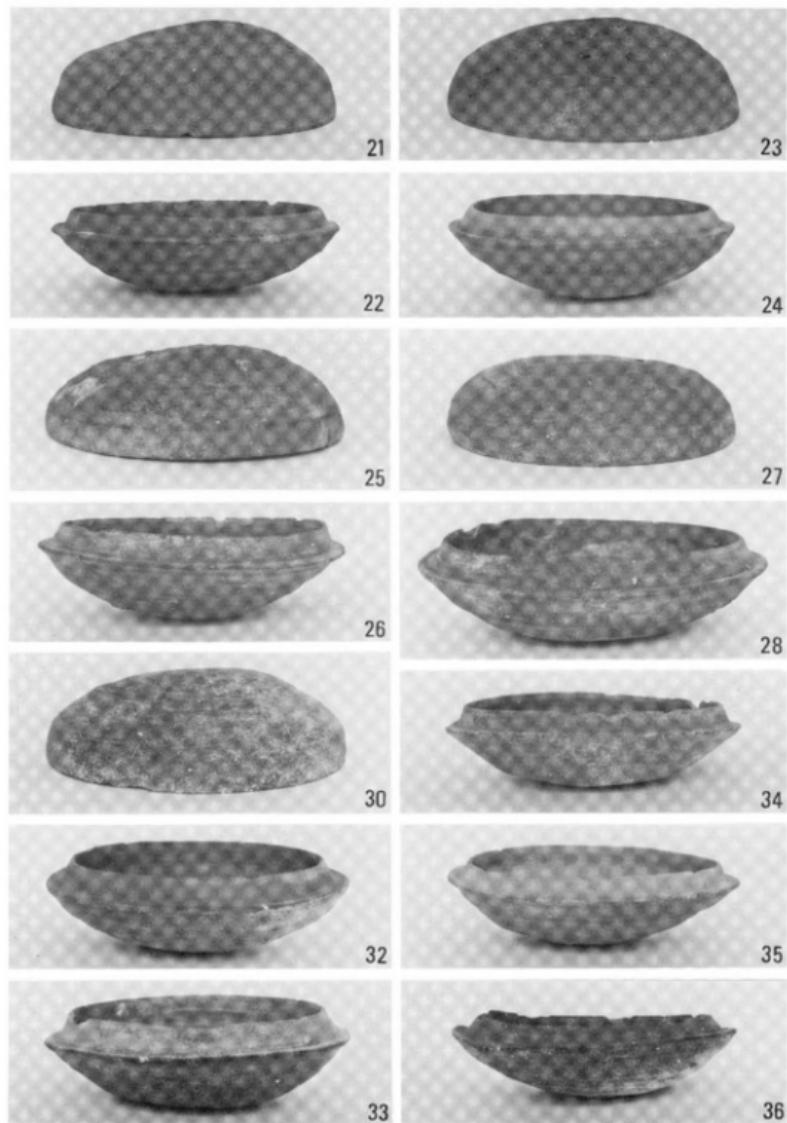
2. 墳頂からの眺望（左：牛窓港 右：黒島）

図版 20



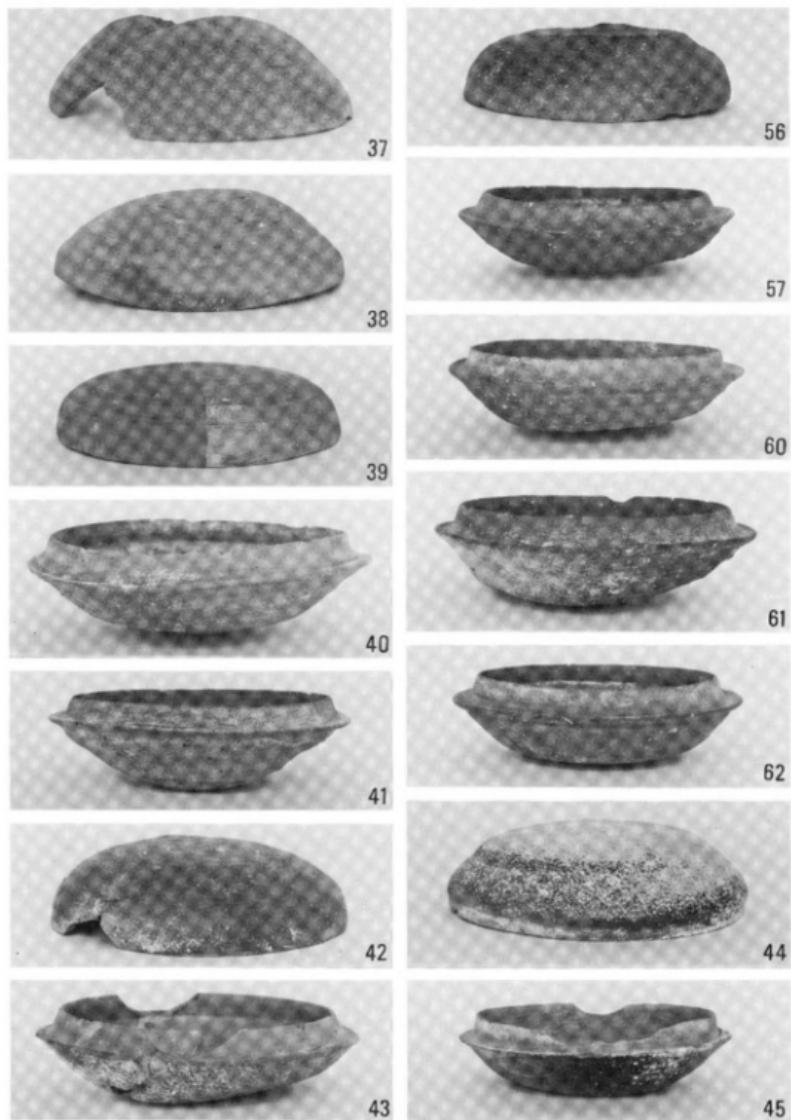
出土須恵器（1）

図版 21



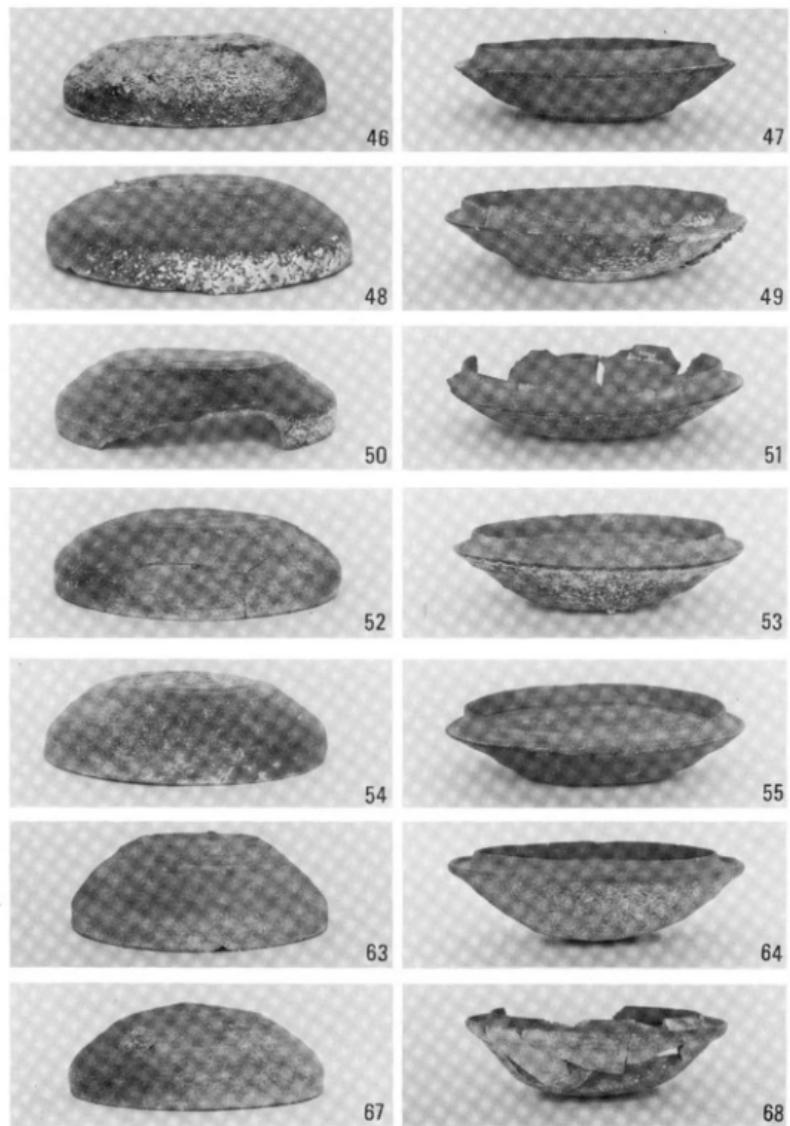
出土須恵器 (2)

図版 22



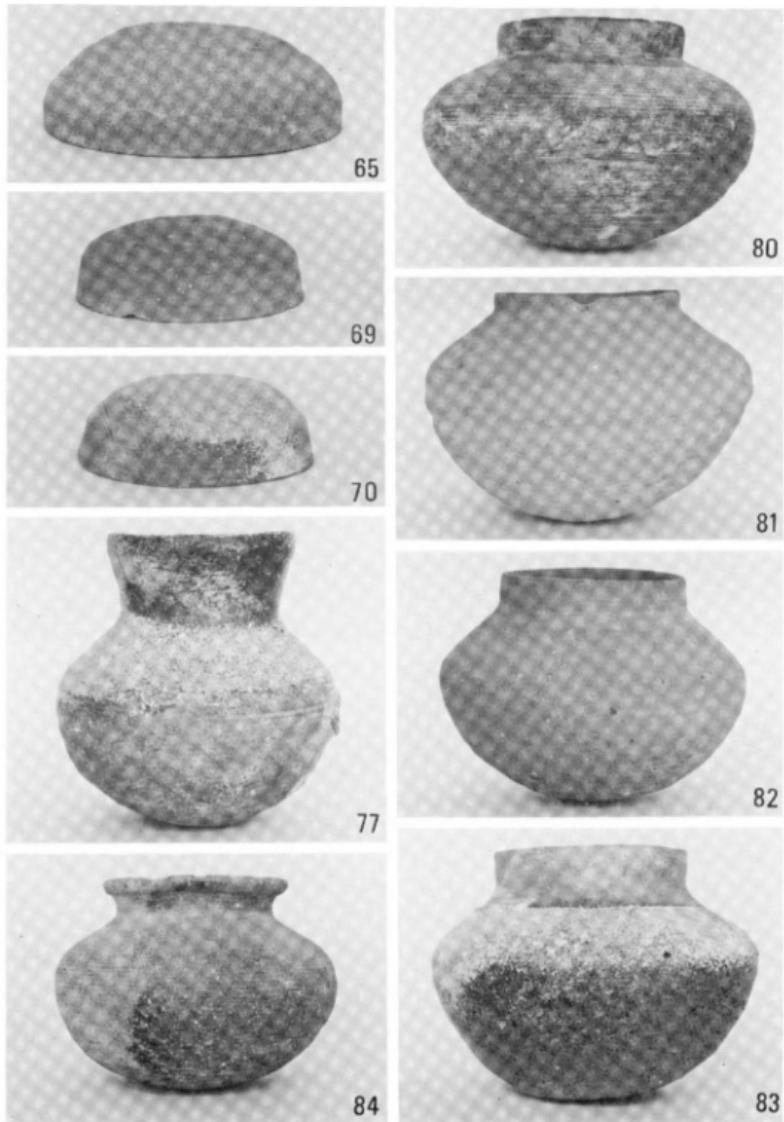
出土須恵器（3）

図版 23



出土須恵器（4）

図版 24



出土須恵器（5）

図版 25



73



74



76



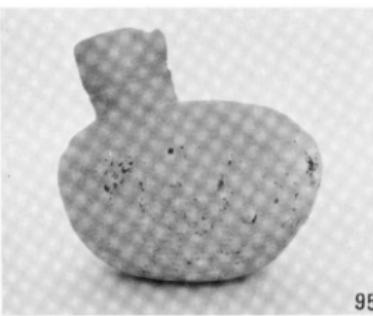
75

出土須恵器（6）

図版 26

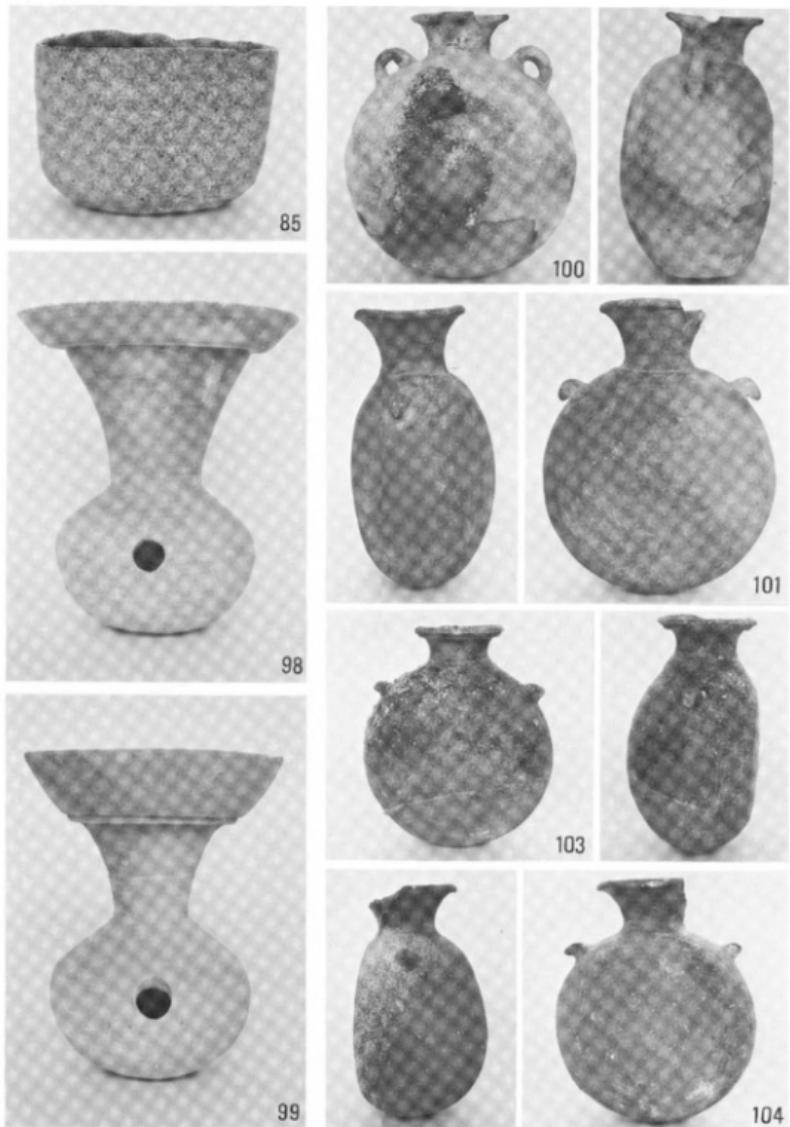


出土須恵器（7）

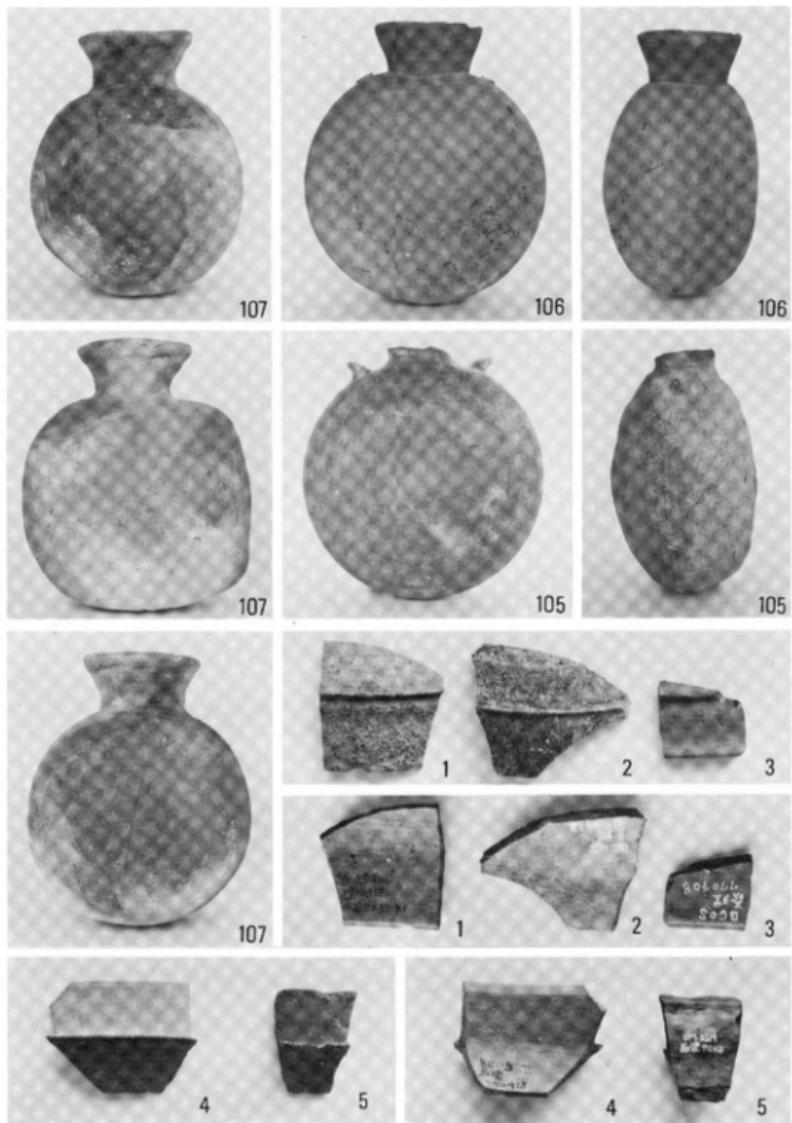


出土須恵器 (8)

図版 28



出土須恵器（9）



出土須恵器 (10)

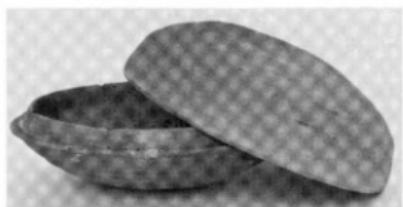
図版 30



108



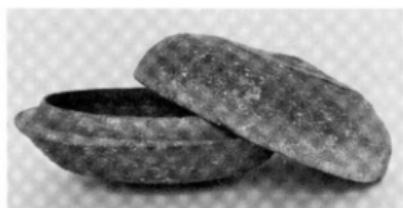
蓋杯 3 類 (14・15)



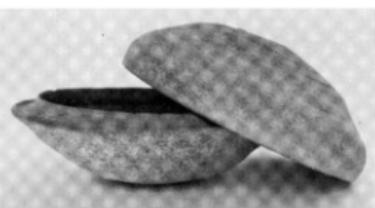
蓋杯 4 類 (21・22)



蓋杯 5 類 (46・47)



蓋杯 6 類 (56・57)



蓋杯 7 類 (67・64)



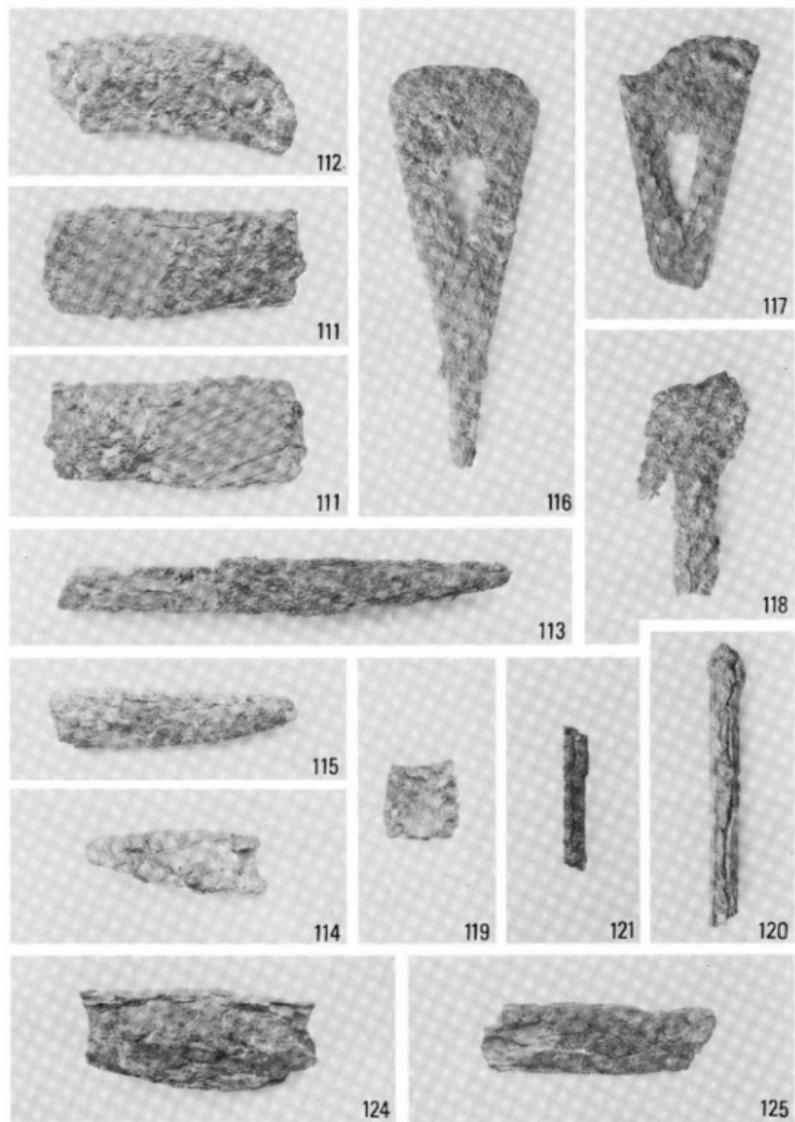
23



28

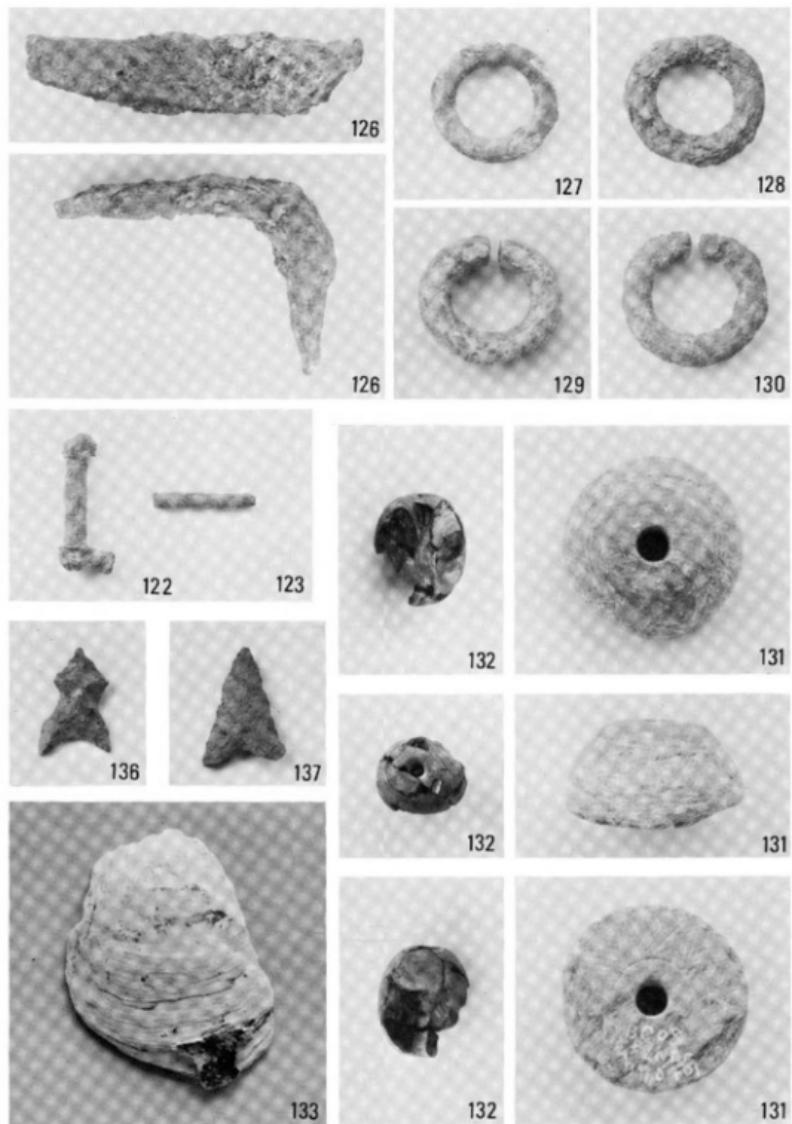
出土須恵器 (11)・土師器

図版 31



出土鉄器（1）

図版 32



出土鉄器（2）・銅器・石器・貝

岡山県邑久郡牛窓町
乙佐塚古墳発掘調査報告書

昭和61年3月20日 印刷
昭和61年3月30日 発行

発行 乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会
岡山県邑久郡牛窓町牛窓4944-2
印刷 フジイ印刷株式会社
岡山県邑久郡牛窓町牛窓4947-17

